

育教の兒幼

號四第 號 月 四 卷九十三第



內校學範師等高子女京東
會協園稚幼本曰

倉橋惣三編 (新刊)

新體幼稚園唱歌

四六倍判
定價(送料共)

金七拾錢

目 日本国旗の丸の旗
倉橋惣三 作曲
小松耕輔 作詞

次 道 ぶ し ん
倉橋惣三 作曲
井上武士 作詞

いうびんやさん 倉橋惣三 作曲
弘田龍太郎 作詞

渡し場の船頭さん 倉橋惣三 作曲
中山晋平 作詞

火消しのなぢさん 倉橋惣三 作曲
小林つや江 作詞

日本幼稚園協會編 (新刊)

幼稚園新唱歌

四六倍判
定價(送料共)

金五拾錢

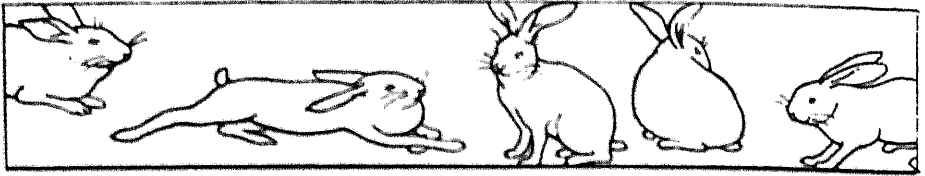
目 だ か
小松耕輔 作詞
小杉山米子 作曲

次 雨 ふ し ん 場
小松耕輔 作詞
小松耕輔 作曲

ほ た る
青山綾子 作曲
小松耕輔 作詞

ふ し ん 場
小松耕輔 作詞
小松耕輔 作曲

○この二つの新刊幼稚園唱歌集は、幼稚園の爲に新しい歌曲を求めて居らるゝ方々に必ずや充分歓迎せらるることを期待してゐる。



號四第 育教の兒幼 卷九十三第

(次 目)

口 繪

卷頭「迎へる心」……………倉橋惣三(一)

日本の幼稚園……………倉橋惣三(二)

新入園兒の父兄に告ぐ……………和田 實(六)

幼兒の時間觀念……………依 田 新(五)

幼兒に對する歌へ方の指導……………田代順之(六)

蜜蜂の生活斷片……………久米又三(七)

幼兒觀察の一調査……………弘 田 芳 弘(八)

巨人物語……………石 井 庄 司(九)

給食と幼稚園……………坂 内 い つ (十)

その他……………K 子 (元)

園庭に於ける遊びと動きの調査……………青 柳 節 子 (雙)

ある一男兒の保育日記をめぐりて……………杉 山 米 子 (嬰)

ハイデイ——ヨハンナ・スビリ原作……………津 田 芳 雄 譯 (西)

文 部 省 推 薦 圖 書

幼 兒 心 理 學

恩賜財團愛育會
兒童教養相談所主任

山 下 俊 郎 著

四六制美裝四三〇頁
定 價 二・五〇
送 料 一・四〇

我兒の幼時を大切に
することは彼の一生
を光輝あらしめるこ
とである。

本書は現代兒童心理
學研究の成果を育兒
の實際に適用した稀
な良書である。

本書は一歳より七歳に至る幼児の心理学を親切に、平易に解説した
ものである。特に幼稚園兒童については意を用ひ、玩具のえらび
方、あそびせ方、遊戯の特徴、あまへ言葉
の直し方等、保姆の日常必須の問題や事
項が、最近の心理學的研究を基礎にし
て、きはめて實際的に説明せられてゐる
幼稚園の教育上保姆のなやむ問題はここに
科學的な立場から完全に説明せられ、毎日の保育は
自信と安心に充ちて、楽しく遂行する事が出来よう。



★ 序論 乳兒の心理 新生兒・感覺生活・智能の芽生え・乳兒の心理的特徴
★ 內 幼兒の心理 運動能力の發達・言葉の發達・空間・時間・數の觀念・記憶と
注意・思考・創作・情緒生活・好奇心と興味・社會性・遊び・習慣の持つ意義・道德
★ 容 的發達 幼時の精神検査 精神検査の概観・現行の幼兒智能検査法・検査の結果
の表はし方とその意味・精神検査に對する態度 結語 就學可能性の問題 附録文獻

(4)五三一四段九話電
番六五五六京東營振

店 書 堂 松 巖

區 田 神 市 京 東
二 ノ 二 町 保 神



附屬幼稚園

春胎蕩

幼 児 の 教 育

昭和十四年四月

迎へる心

教育者は、與へるこゝの任務からか、さうも、迎へる心に缺け易い。來るなら來いであつたり、あゝ來たのかであつたり、更には、さうかまへて押しつけるこゝであつたりする。そして、先方が受けないと言つて、腹を立てたりする。それが、さうしても迎へる心一つで相手の前に出なければならぬのが、新入園の幼児達を迎へる時である。こつちから期待し、要求し、註文するやうな、謂はゞこつちからの態度を一切封じて、ひたすら迎へる心になるのである。

迎へる心は、先方を主とする心である以上、ひゞり／＼をひゞり／＼とする心でもある。與へるには、集め揃へて置いて、蒔き與へ投げ與へるこゝも出來る。迎へるにはひゞりづゝ、ひゞりびゞりでなければならぬ。さうでなければ、少くも先方に於て、迎へられたと思へない。與へるこゝは、相手を主にしながら、こつちが主になるこゝが多い。迎へるこゝは、こつちが主であるやうで、迎へられてゐると思ふ先方の心が中心だからである。

迎へる心で一ぱいになり切つてゐる先生、それが四月の先生である。なんぢ、いつもの「先生」ばなれをしてゐるこゝであらう。

(倉橋生)

日本の幼稚園

(三月十七日早曉A・Kより歐米への國際放送の原稿。讀者にはつまらぬものながら、外國人にどういふことを話したかの報告として)

倉 橋 惣 一

日本の幼稚園に就て語るに當つて、幼児達が幼稚園で嬉々として遊んでゐる、にぎやかな笑ひ聲や、かはいらしい歌の聲を放送することの出来ないのが残念である。實際日本の幼稚園は、子ども等にとつて最も楽しい。

その楽しい幼稚園は日本の全國に普及してゐる。殊に主なる都市に於ては、相當によく設備せられた、幾つかの幼稚園をもたないところは無い。東京府の如きは四百に近く、大阪府、京都府の如きは共に各二百に近い。その一つは、日本風に歐米風を加味した愛すべき獨立建の建築を種々施設せられた庭園をからなり、各が、多きは二百名、少きは五十名位の幼児を定員としてゐる。若し此頃の春に、それ等の幼稚園を訪ふ視察者があるならば、明るい日光を全身に浴して、嬉々として遊びつゞけてゐる幼児達の幸福な情景の裡に、自分も溶けてゆきそうな小さい樂天地を、そこに見出さずに措かないであらう。

勿論、日本に古い昔から幼稚園があつたのではない。この國でも同じやうに、フレイベルがそのキンダーガルテンをブランケンブルヒに創設した以前から幼稚園があつた筈はない。それがフレイベルの方法に據つて、初めて日本に幼稚園が開設せられたのは、西曆一八七六年のことである。フレイベルがキンダーガルテンの名を創案したのが一八三七年であるから、その後三十六年目に相當する。必ずしも早いとはいへないが、アメリカに最初の幼稚園が開設せられた時に比して、僅に十六年の後である。當時日本は世界の長所を採つて新教育制度を建設して居つた時であるが、幼稚園は最も早く着眼せられた施設であつて、ドイツアメリカから學んだ。但し、多くの國々の場合の如く、外國の人々から渡來せら

れたのではなく、日本の政府が自らその方法を探つたのである。爾來、幼稚園の数は公立私立とも、年々共に全國に普及し、今日に於て、その數約二千餘に達してゐる。但し之れは、幼稚園の名に於て公認登録せられてゐるものだけの數であつて、幼稚園の名によらずして同じく幼児保育をなしてゐる保育所の數を加ふれば約二千六百五十以上になるのである。

その保育方法の内容に於ては、創設の初めは、當時ドイツ、殊にアメリカに行はれてゐたフレーベル式により、即ち、純然たる所謂フレーベルヤン・オルソドツクスであつた。日本がフレーベルを研究せる事は、既にその當時からであつて、それに關する多くの書物も刊行せられたが、フレーベルの名著 'Menschenziehung' 又 'Mutter-und-Kose Lieder' の翻譯も、早くから出版せられた。而して、フレーベル主義方法の普及に就ては一八八五年頃からアメリカ宣教師によつて國內各地に設立せられた幼稚園からの影響が與るに就ては頗る多い。これは日本が忘れてはならない感謝であるが、しかも、日本人による幼稚園は、決して單なる翻譯によらず、日本在來の兒童生活とその教育法を適宜加味することを忘れなかつた。その後、外國に於ける幼稚園法の進歩、革新につれて、その學說も、方法の實際も、機を逸せず敏感に採り入れられ、アメリカのスタンレー・ホール (Stanley Hall) ション・ヂュエー (John Dewey) 等の所謂 新幼稚園法は素より、イタリーのモンテッソリー (Montessori) 法、スイスのクラパレード (Claparede) 法、ベルギーのダルクローズの説、さては、イギリス、アメリカのナーセリー・スクール (Nursery school) の如き、いづれも速に研究せられ、長を採り短を捨つるの精神に於て、日本の幼稚園に咀嚼せられた。従つて、初期の純フレーベル主義は今日に於てそのまゝは行はれず、極めて進歩的なるものとなつてゐる。たゞへば、文部省が立てゝゐる東京女子高等師範學校の附屬幼稚園の如き、アメリカのコロンビヤ大學幼稚園に劣らざる新原理に立つてゐることは、アメリカの訪問客も常に言ふところである。

しかし、それは方法のおもてのこゝであつて、その根本の精神に於ては、さうまでも、日本の教育精神によつて日本の幼兒を教育せんとするのであり、殊に、性格の陶冶に於てさうである。幼稚園令第一條には、幼稚園の目的として、幼兒の心身の健全なる發達、善良なる性情の涵養、その二點に重きが置かれてゐるが、その「善良なる性情」といはれるものは、一般の道德的又は美的なる諸情操の外に、皇室に忠に、國を愛し、父母に孝に、家を愛する日本精神の基本の涵養を、幼兒の心理的發達に即して涵養せんことを重要視してゐるのである。その他、遊戲、唱歌、手技、圖畫等に於ても、日本古來の心持ちが主としてその本色をなしてゐる。更に、日本に古くから傳統するところの年中行事、たゞへば三月、

五月の雛祭の如き、幼稚園として固く、また楽しく守りつけられてゐる。幼児達がそれを喜ぶことも大きいのである。幼稚園が都會に多いことは、現代的生活の實狀によること明かであるが、農村漁村に於ても、多忙なる家庭のために、その設備がある。殊に季節託児所と稱して、農業や漁業の最も繁忙なる季節に於て、臨時的に設けられる短期の幼児保育施設は、蓋し、日本特有の施設である。臨時的さはいふものゝ、毎年一定季節に恒例的に開かれるのであつて、その數現在に於て、約二千以上に上り、更に年々著しき増加を見つゝある。その設備は大體簡單なるものが多いが、専ら時宜に適し、又それらの地方に即する方法によるのであり、之れが全國の幼児及びその家庭の上に與へつゝある良影響は頗る大きい。又、その短期臨時なる出發が、その必要に促されて、常設のものにまで發展充實する場合が尠くなくない。

以上の如く國內に多く普及してゐる幼児保育施設のために、最も必要なるものは良き保姆 Kindergarten であるが、その養成機關も亦、殆んど幼稚園創設の時代から設けられて居り、今日に於ては官立、公立、私立の保姆養成所によつて、年々多數の保姆が養成せられてゐる。日本に於ける幼稚園保姆は高等女學校の卒業者が、正規の保姆養成所に於て、専門の教育と實習とを受けたる後、その資格が與へられるのであつて、その免許状なくして保姆たることはゆるされぬ。而してそれ等の養成所の新らしき出身者は皆若い青年女子であるが、先輩たる老保姆の指導と訓陶によつて、斯の尊い仕事に熟練せられ、皆純真なる兒童愛と、熱烈なる教育精神と、殊に日本女性の誠實なる奉仕心を以て、幼児達のために、周到なる世話と、細心なる訓練とを盡して疲るゝを知らない。その保姆の中には自ら母である人々も多いが、そうでない若き人々も、その活動は悉く母性活動であつて、柔和と懇切とを以て連日その任に當つてゐる。私はアメリカ及びヨーロッパの各國を巡つて多くの幼稚園を視察した。その設備の整へることに度々感心した。殊に保姆の人々の高い學識と、優秀なる保育技術とに對して、深く敬服した。しかし、其の母性的柔和と母性的懇切とに於ては、世界に向つて、自分の國の幼稚園保姆を遠慮なく誇り得るに信じてゐる。

而して是等の熱心なる幼稚園教育者は、各地方別に、又佛敎主義者、キリスト敎主義者等の別によつて、それらの協會を組織し、更にその聯盟を結成し、此の教育の普及、發達と共に、自分達の教養のために怠らざる努力をつゞけてゐる。又、専ら幼稚園教育の研究を目的とする研究團體が幾つもある。それ等から發行されてゐる、月刊の幼児教育専門雜誌も數種ある。殊に、保育法の進歩に遅れないために、保姆の再教育を目的とする講習會は、國の文部省が年々定期的

に開くものゝ外、各地方廳及び幼稚園諸團體によつて開かれる數が、極めて多きに上る。又、屢々開催せられることの、全國的な會合の盛大さは、年々共に益々此の教育の發展しゆくことを如實に示してゐる。

以上、日本の幼稚園の現状であるが、最後に特に一言して置きたいことは、最近日本政府が企てゝゐる教育制度の全面的改善の方針の中に、幼稚園が國民普通教育の基礎として、大に重視せられてゐることである。その改善の着手に先だつて、政府により設置せられた有力なる教育審議會に於て、委員の間に討議決定せられた條項が次の如くである。

- 一 幼稚園ノ設置ニ付一層獎勵ヲ加フルト共ニ特別ノ必要アル場合ハ簡易ナル幼稚園ノ施設ヲモ認ムルコト
- 二 幼児ノ保育ニ付テハ特ニ其ノ保健並ニ躑ヲ重視シテ之ガ刷新ヲ圖ルコト
- 三 保姆ニ付テハ其ノ養成機關ノ整備擴充ニカムルト共ニ其ノ待遇改善ヲ圖ルコト
- 四 幼稚園ト家庭トノ關係ヲ一層緊密ナラシムルト共ニ之ニ依リ家庭教育ノ改善ニ裨益セシメ、併セテ幼稚園ノ社會的機能ノ發揮ニカメセシムルコト

之れは極めて要綱を示せるものであつて、辭句も甚だ簡單であるが、此の中に含まれてゐる趣旨は、現代幼児教育施設の必須の趨勢であつて、之れによつて日本の幼稚園が、向はんことを主張してゐる方向の正しさを熱意を知ることが出来る。熱心なる論者の中には幼稚園を小學校と同様義務制にすることを主張してゐる叫びもある程であるが、その實現を見ることに拘はらず、幼稚園の全國的普及は、たゞにその數の上の盛況を希ふばかりでなく、生活層の別によつて、幼稚園教育を受くる幼児と、そうでない幼児との區別が起ることなきやう、日本の全幼児をして、平等に、幸福にして有效なる幼稚園教育を享受せしめたいといふことが、日本の今の方針になつてゐるのである。

之れを以て、此の放送を終るが、若し諸君の中、日本を來り訪ふ人のある場合には、是非、幼稚園を訪問して下さい。可愛い、幼児達の群は、あなたを心から歓迎して、あなたに歸る時を忘れさせるであらう。さようなら。

新入園児の父兄に告ぐ

目白幼稚園 和田 實

六

幼稚園の教育は、學齡以前の教育でありますから、之を學齡以後の教育に較らざるは、色々の特異點を持つて居ります。そして、教育の終りが、小學校の教育に引き繼ぐのでありますから、或る意味では、小學校教育の準備のための教育であるに云ふことに間違はないのであります。従つて、子供を幼稚園にお入れになつた父兄の方々は、此幼稚園教育の特異點を小學校教育への眞の準備の意義を理解せられて、幼稚園と協力して、子供衆の教育に萬々遺漏のない様になさるゝことが必要な事だらうと存じます。次に、之に關して、少しく述べて見たいと思ひます。

幼稚園教育の特異點

幼稚園教育が、小學校以後の諸教育と異なる主なる特異點は、先づ第一に學術を傳授することに、重きを置かぬに云ふことです。小學校が、日常生活に必須な知識や技能を教授し、啓發することを主なる仕事として居るに反して、幼稚園は悠々自適、急がず、焦らず、自由な遊樂を是れ事として、遊び暮らして居ます。誠に、呑氣なものです。此

呑氣さ、自由遊樂の自適生活に云ふものが、幼児の生活に、極めて、大切な點で、幼児は是れあるが爲めに、其個性の赴く儘に、發達することが出来るので、同時に強くなることも出来るので、若し、幼児の生活から此呑氣さを奪ひ、其自由遊樂の生活を奪ひ去つたら、果して、其結果は何うなるでせう。私の知人に、幼児に對して、非常に、嚴格に、躰けを仕様した人がありまして、子供の此自由行樂を許さず、大人と同様な生活様式を習慣づけ様とした人がありましたが、子供は遂に、父親の居る所、父親の知つて居る所では、非常に、慎み深く、羊の如く柔順に、大人の様に、しみやかに振舞つて居りますが、一度父親の姿の見えぬ所、父親の足音が門の外に消えたが最期、其性格は豹變して、祖父母や母親には手のつけ様の無い亂暴、狼籍を振舞ふ子供になりました。幸に、私共の注告を入れて父親が、躰けの方針を改變しましたので、今はすつかり直りましたが、一時は母親を泣かしたものでした。

斯様に、幼児の生活に云ふものは、悠々自適生活を主

こして居るものでありますから、一寸考へるに教育なき出來さうもない様に見えますが、實際は決して、心配したものでなく、其模倣力を利用して、躑をしたり、其興味を誘導することに因つて、知らず識らずの中に、教育の目的に向つて、結構、之を感化誘導することが出来るものであります。要するに、子供の生活に云ふものは、悠々自適の遊樂で終始して居るものでありますが、そして、其教育は反省的、意識的に行ふことは出来ませんが、教育者の模範的德行に因つて、直接に感化し、誘導することの出来るものであります。従つて、父兄たるものは、子供を幼稚園に入れたからして、日々何事かを覚えて来るだらう、讀み、書き、そろばんの一端を學んで来るだらうなき、考へてはなりません。幼稚園では唱歌も教へます、手工も行ひます。繪も書けば文字も覺えます。併し、學問や藝術を傳授する意味で、教へるのではないのです。只、遊樂の材料として教へるのですから、文字の書き方が少々間違つて居やうが、繪の描き方が下手であらうが、一向、かまはないので、誤りや上手下手は成る可く、子供自身が氣が付いて、自ら直して行く様に仕向けて行くのであります。

子供の發達は自身力

教育の力に云ふものは萬能的なものではありません。生れ付のよくないものを、其生れ付以上の良いものに仕様こ

しても、出来るものではありません。それですから、良い生れ付の子供を得やうに云ふことは、世間の親に云ふ親が皆、望んで居るところではありませんが、是れには、優生學の原理に従つて、優生結婚をすることが、根本の問題であります。併し、是れは本文の問題外でありますから、私は茲に之を述べることは遠慮して、既に、生れ付いて居る子供を如何に教育す可きかを、我等の研究主題とするここに止めませう。

既に、生れ付いて居る以上、子供は生命の力を以て居ます。生命の力に云ふものは、活動の力であります。此活動の力は、一刻一秒も休止することはありません。消極的には生命を維持する活動になつて、飲食、消化、休養の働きとなりませんが、積極的には、遊戯、學習、作業等の活動になつて、盛んに、自己を表現して行きます。此自己を表現する力に云ふものは、非常に強いもので、時には、何物も之を抑壓することの出來ぬ位に、強く現はれ、時には、自分自身でさへ、抑へきれぬに云ふ力強さを持つこともあります。併し、子供のまだ物心付かぬ中に、之を抑壓することに成功すること、弱い柔かいものにすることも出來ます。此生きる力を強めて行くか、弱めて行くか云ふことで、子供の發達、子供の生命の進展に、色々の差異が出て來ることになります。若し、子供の生きる力を何處迄も伸

ばすこゝに因つて、其社會的活動を大に期待したいならば、之を保育するものは、其子供の自由な自己活動を抑壓したり、邪魔したり、干渉したりしてはならぬ筈であります。子供を伸々伸ばす云ふことは幼児保育の當面の理想としなければならぬ筈であります。然るに、世間の親達は、さもするに、子供のすることに干渉して、然うしてはいけぬ、こゝしてはいけぬ。斯うするのだ、あゝするのだ、強制することに因つて、教育して行かうとして居ますが、こんなことで、子供の生命力を伸ばすことが、出来るものではありません。

人は子供に「學ばせる」勉強させる」云ふことで、偉いものに仕上げるこゝが出来ると、思つて居る人が多いですが、他から強制したからして生命の力が活動するものではなく、注入したからして、知識が活用出来るものではありません。子供の活きる力云ふものは、意志、欲望、さなつて現はれ、此意志欲望が、段々發展して行つて、色々の社會的活動となるものでありますから、此意志や欲望の進展、調制が教育上、大變大事なことになるのであります。是も、既に子供に一定の欲望なり、意志なりが決定してしまつてからは、如何に、他のものが騒いだところで、何うにもなるものではありません。此意志欲望が、如何に調制され、如何に進展されて行くかは、生活環境の

力で、(勿論、教育の力も加はりますが)其他の何ものでもありません。教育者の力云ふものも、單に、環境の一勢力として有力なので、若し、教育者が、幼児の環境を調制することに盡力しないで、直接に、幼児に干渉することを以て、自己の教育力を現はさうしたら、夫れは當然、失敗することになるでせう。夫れですから、幼児を教育するには、教育者自身の計劃や、主義や、方法や干渉を直接、幼児に加へることをなしに、間接に、施設や、環境の上に加へて、幼児の生活を自然に變化させることに因つて、之を引き廻はして行く様にしなければならぬのであります。孟母三遷の教は之を實際に證明して居る譯であります。要するに、子供は自分の力で、發展して行くので、決して、人の干渉や命令に因つて發達して行くものではありません。

子供の自我意識

「自分云ふものが、何んなものか云ふことは、二二三歳の頃から、段々判つて來ますが、殊に、友達遊びをする様になるに、一段急速に、發達して來ます。人間は孤獨生活の出來ないものですから、三四歳以後になるに友達を求めて遊ぶには居られないものであります。友達と遊ぶには、時には、友達と衝突して争はなければならぬこと、もあらうし、時に譲らなければならぬこと、ありませう。此争つたり、妥協したり、共同したり、援け合つたりして

居る中に、子供は、自己の意志欲望が何んな形のものか、自分の力云ふものが、何の位の價値があるものか、云ふことが、はつきり判る様になります。同時に友達との社會に於て、自分の振舞へる範圍が何の位の廣さのものか、自分の勢力が、何の位の強さを持つものか云ふことも、判然ミ、意識することが出来る様になります。そして又、自分の活躍する領分は何處か云ふことも、將來、自分の進展して行く可き方面もおぼろげながらに意識することが出来る様になるものであります。是等の發達は總括して、自我意識の發達云ふことが出来ます。此自我意識が發達することに因つて、人間の活きる力云ふものが、意義ある生活になつて、人世社會に具現されるものであります。而して、是等の自我意識の發達も、畢竟、幼兒が日常の生活環境よりして、自然に、味得して行くもので、入れ智慧や、注告や、勸説や説諭などで、短時日で極まるものではありません。両親の指導を基礎とする家庭生活、長い間の友達生活、郷土の社會的影響等に因つて、自然々々に培はれて行くものであります。勿論指導者の指導精神云ふものが、間接には、大に影響はして行きますが、之が直接幼兒に、影響して行くことにはないのであります。教育者の直接指導が直接に、効果を現はすのは被教育者がつま大きくなつて、知的作用が進歩して、指導精神其ものを、直接

に、理解することの出来る時にならねばならぬのであります。

併し又一方は此自我意識云ふものは餘りに反省的に發達して、自己の力の不甲斐なさを自覺したり、自分の能力の貧弱さを理解したりするミ、自分で、自身の意志欲望を鈍らせて、卑屈な生活、卑下した生活の外、生活が出来なくなつて、自分で、自分を社會の落伍者にして仕舞ふ云ふことにならんミも限りませんから、幼兒の自我意識は餘りに發達し過ぎる様なことを無い様に、指導者は、注意して、之を間接に鼓舞獎勵することを忘れてはなりません。之が爲めには、幼兒の成績云ふものは、何時も、是認し満足し賞美し、獎勵することが必要であります。妄りに、幼兒の成績を批評したり、批判したりしてはならぬのであります。父兄たるものは、幼稚園から歸つて來た子供を捉へて、批判的に評價することのない様に、注意しなければなりません。人は自信あることに因つて、仕事が出来るのであります。幼兒には己惚れが必要であります。之に強き意志、欲望が働くことに因つて、活氣ある活動が出来、全身全力を傾けて、活躍する様な飛躍的の仕事も出来るのであります。

多方の興味培養が目的

子供が學齡に達した際に、何の位の熱を以て、學習に従

事するか云ふことは、其子供の過去の経験に因つて培はれた興味^の程度^を廣さ^にに因るものであります。強き興味があれば學習の熱は上ります。興味が多方にあれば學習も多方面に互るこゝが出来ます。多方の興味を持つて居るか居ないか云ふことは、學習の基礎が出来たか何うか云ふことになりまますから、小學校の準備教育としては是れ程、大切なことはありません。而して、多方の興味云ふものは、豊富な経験から來るものでありますから、子供には遊樂的に、多種多様な経験を與へるこゝが必要です。豊富な経験に因つて、多方面の事物に、悉く興味を持つこゝが出来れば、凡ゆる學習事項は熱を持つて迎へられ、熱を以て受取られることになりまます。此爲めには、子供の遊び云ふものは、其種類が偏らぬ様に、何でも、能く、遊ぶ云ふこゝが大切であります。是は、何も、保育者が心掛けずとも、子供は、自然に、然様になつて行くものですから、其自然の傾向に應じてやる用意があれば、よい譯であります。富裕な家の子供が偏食で困る様に、我まゝな子供は遊びにも好き嫌ひをします。友達にも愛憎の差別を付けます。是等は偏食の害ある様に、子供の經驗的發達に、大に偏傾を作るこゝになります。子供の經驗の偏らぬ様に、そして、成る可く多方面の興味を充分満足さす様にしてやらねば圓満な發達は望み悪いこゝになりませう。いたづら

な子供は器用なもので、何でも行きます、何をさせても、上手に行りますが、所謂、おこなし、子供はいたづらをしてないだけそれだけ經驗は少く、不器用であります。幼稚園が何くれもなく種々な細工や手すさびを獎勵するのは、此意味で、子供を器用にすると共に、其経験を豊富にし、其興味を進展させ様にして居るのであります。

斯様にして、澤山な経験と興味があれば學習事項は易々記憶するこゝの出來る聯合基點を持つこゝになりませう。小學校に行つた時、先生の教ゆるこゝを、此聯合據點に聯關させるこゝに因つて、譯もなく覺えるこゝも出來、理解するこゝ、會得するこゝも出來るでせう。故に、多方豊富な経験を與へるこゝに因つて、多方の興味を培つて置くこゝいふこゝは學齡以前に於ける眞の準備教育であります。是が本當の、眞正の、入學準備云へるでせう。背囊を調へ、辯當箱、草履袋を用意するこゝも、入學準備には違ひありませんが、教育的に云ふ眞の入學準備といふものではありますまい。尤も、此外に大切な入學準備として、子供の健康の増進云ふこゝがありますが、是は自我意識の發達と共に發達して來るもので、子供が學齡に達する頃には、自然、充分學習に堪え得るこゝの健康を保ち得るものでありますし、事柄が生理衛生上のこゝで、お醫者さんの領分に屬しますので、今茲には略するこゝにいたしま

せう。要するに、幼児教育に於ては、豊富な経験を與ふることに因つて多分の興味を培養し、多方の能力を練習し、幾多の聯合據點を造ることに、努力することが必要であります。幼稚園は此爲めに是非必要なものであります。

父兄は幼稚園に信頼せよ

大事な子寶を人に托するのですから、心配なのは無理もないことですが、然りて愚にもつかぬ取越苦勞をして、心ある人をして、眉を擡めしめるに云ふことは、感心したことはありません。幼稚園の先生は、先生としての相當の師範教育を受けた人であり、職業的良心も、人格も相當に發達して居る人であり、一視同仁に、幼兒を可愛がつて呉れることに間違はないのであります。然るに、之を疑つて、或は依怙の沙汰がありはしないか、或は不行届のことがありはしないか、心配の餘り、幼兒の歸宅を待つて、色々聞き訂し、或は幼兒の片言を信じて、幼稚園に抗議するなき、色々事件を醸もし出すことがありますが、多くは杞憂に過ぎないものであります。尤も先生とて神様でない限り、注意の行き届かぬところが無いとも限りませんが、不審の點を尋ねるのは一向差支ないことで、尋ねて明かに判つたら、夫れで満足す可きで、何處迄も、光風齊月の想ひで幼稚園には對す可きであります。然るに、父兄に因つては却つて、先生の公明正大な取扱に

は不服で、特に、自分の家の子供だけ特別な優遇に預りたい希望する向きがあります。此差別待遇を要求する爲めに、特に幼稚園に、金品を寄贈したり、或は、先生に特別なサービス又は贈與なごをして、只管、先生の歡心を得やうと努める人がありますが、甚だ迷惑な話であります。且又、斯様にして、自分の子供だけに、特別サービスをして貰ふことが、何れ丈け自分の子供を利するでせうか、是は子供の爲めに、一考を要することであり、幼稚園では凡ての子供が對等の位置に立つて交際す可きで、斯くすることが各個の子供を一様に、訓練することが出来るので、自我意識は此對等關係に於いて生活する子供の間に切磋琢磨されて發達するので、決して、特別サービスの子供の享有す可き利益ではないのであります。價值なくして好遇せらるゝことは、結局其子供の切磋琢磨される機會を逸すること、根のない花、實質のない果實に過ぎないので、現在如何にも仕合せの様ですが、頓がて、虛榮の夢が、覺めた時には、徒らに、自己の無價値に驚くことになりませう。決して、其子を教育することに於てはならないのであります。可愛い子には旅をさせる可きで、子供を價值以上に好遇することは、決して教育の本道ではありません。

然のみならず、世間には随分判らずやとも云ふ可き人があつて、甚だしいのなるに、自己の社會的優位を利用し

て、先生を脅迫して迄も、自分の子供を、特に、注意させ様を試みるものがあります。嘗て、私の幼稚園にあつた事でしたが、子供が家庭で、釘に觸れて、かすり傷を負つたのを、大仰に繻帯して置いて、翌日、幼稚園へ云ひ掛りを云ひ立て、指の骨を折つて歸つて来た、幼稚園は、もつと、注意す可きだ云つて来たのがありました、斯る見え透いたトリック迄しても、自分の子供に差別優遇をして貰ひたいのが、世間の親の人情でも云ひませうか、然りもは淺果なこゝであります。是等は唯、人の物笑の種子になるだけで、何等子供の爲めにはならぬこゝですから、注意しなければならぬこゝであります。

以上、色々なこゝを書きましたが、要するに、子供は、自己自身の生命力に因つて、其自我を確立し、發展させて、之を社會的に實現しやうとして居るもので、此子供自身の活動を助けて、完全なる自己發展の基礎を作らせ、將來の學習に對する眞の準備を用意させるこゝが、幼稚園の使命である云ふこゝを、世の父兄方に理解して置いて頂きたいと思ひます。

○
新らしく迎へた子も達の名を讀むのも楽しいこゝの一つである。なんざいろ／＼のいゝ名がつけてあるこゝであらう。昭の字や和の字の多いのは、此の御代を壽ぐ心からであらうが、その後ろには、此の聖代に生れた我子の幸を祈る心も籠めてあらう。榮子よ榮へあれ、博子よ心博かれ、智子よ賢かれ、みんな親心の有り難さが響きこぼれる。鶴子の齡久しく目出度き、ちぎりのやさしく可愛らしき、道子の眞直ぐに正しき。さては男の子の和徳、壽夫、義男、有文、康博、あのまんまらい、にこ／＼した顔には、少々不似合なやうな嚴かさであり、むづかしい字でもあるが、そこに、思ひ籠めし親心こそ有り難い。なかには父の名を分け、又、先祖代々の名を分けたのも少くあるまい。斯うして名を讀んで見ただけでも、一人だつて、軽々しく名をつけられてゐるやうな子はない。その子の誕生の日の家の喜び、その名の選び方に頭をひねつた父の顔、その相談の座の楽しい眞面目さ。——一人だつて、うっかり迎へていゝお子さんはない。さへば先生御自身の名だつて容易のものではない。(章象)

幼児の時間観念

東京高等師範學校教授

依田新

「お父さん、巨人ゴリアートはいつも冷たい水で體をふいてゐるの？」

「さうです。だからゴリアートは大變強かつたのです」

「ゴリアートは何時ゐるの？」

「二千年以上昔に」

「その時お父さんも矢つ張りゐるの？」

「いえ」

「そんならさうしてお父さんはゴリアートの事を何でも知つてゐるの？」

「それは本に書いてあるのさ」

「……………」

これは心理學者カッツが五歳二ヶ月になる彼の子供との、朝の寢床の中での、會話の一節である。二千年も前からお父さんは生きてゐたのか、さういふ質問が出てくる所に、この子供の時間観念が未だ十分に秩序づけられてゐな

いことが示されてゐる。カッツは言つてゐる。そしてこの様な時間観念の曖昧さは決してこの一人の子供だけの現象でなくて、この年齢位では一般にさうであると言はれてゐる。例へばビューラーなども、分、時間、週、月等の言葉は大部分の六歳兒には未だはつきりとは理解されてゐないことを述べてゐる。

シュテルンの兒童語彙の調査による、時間の副詞は場所の副詞よりずつとおくれて現れる。さういふことである。即ち、場所の副詞は既に一歳六ヶ月乃至一歳九ヶ月頃に可成り多く現れてくるが、時間に關する副詞は二歳以前に於て現れることは殆ど稀で、三歳になつてから始めて用ゐられる様になる。しかもカッツの子供との會話に見られる様に、たゞへ時間に關係する言葉が使はれてゐても、それから直ちに我々と同じ様な時間の意識があるとは言へない。實際、幼兒に於ては、昨日の事でも一週間前のことでも屢々「昨日」さういふ言葉で表現され、未來はすべて

「明日」といふ言葉で表現されることが多い。そこで我々は今少し立ち入つて彼等の持つ時間の觀念について考察して見よう。

二

幼児の持つてゐる時間觀念は、我々文化的成人のその様に、決して抽象的、形式的な範疇ではなく、具體的に感情や行動と密接に結びついたものである。即ち、未來に關する言葉はその時の「願望」の表現であり、過去に關する言葉は現在に於て完結した行動の「満足」の表現である。

従つて、時間と空間とは互ひに未分化のまゝ具體的な聯關をなしてゐる。夫故に、幼児に於ては時間表象は同時に空間的な性質を持つてゐる。彼等が年や月を空間的な廣がりを持つたものと考へてゐるのもその爲である。

例へば、スクーピンの子供は六歳八ヶ月の時、空を仰ぎその方に手をさしのべながら次の様なことを言つてゐる。

『上の方に晝間があり、その上に次の夜があり、それからずつ上の方にクリスマスがある。』

この様な言ひ方は決して單なる比喩ではなくて、時間空間の未分化の形のそのまゝの表現なのである。だからこそ「お正月がもう山の向ふまで來てゐる」といふ様な表現が、幼児に於ては極めて具體的に體驗されるのである。

又、多くの子供等は曆が時間を作るのだと信じてゐる。

即ち、曆をはぎこむことが現實の時間の進行を可能ならしめるものと信じてゐる。だから彼等に於ては、日曜だから曆が赤いのではなくて、「曆が赤い時」が日曜であるのだ。従つて、幼児に於ては時間は我々成人に於ける様に、連續的な形式ではなくて、不連續的な個物的なものであり、實體的なものである。晝が段々夜になるのではなくて、晝と夜とは全くはつきり區別されるものである。而して、この様な時間分節は感情的色彩を多分に持つところの個々の事象を中心にしてなされてゐる。例へば、朝飯、晝寢、晩飯、誕生日、クリスマス等といふ様な個々の事象によつて一日なり一年なりの時間的系列が不連續的に分節されてゐるのである。

三

この様な幼児の時間意識の構造を理解する爲には、原始民族の持つてゐる時間觀念を調べてみることは非常に參考になる。エルナーの研究によるが、兩者の間には非常に類似した現象が多い。

例へば、子供の場合と同じ様に、原始民族に於ても、時間を現す言葉はある包括的な事象過程の内に於ける顯著な個々の事象を表現する言葉である。エルナーによつて一、二具體的な例をあげてみるが、

ウガンダ人は牧畜を生業とする原始民族であるが、一日

を非常に細かく分節してゐるけれども、それは決して抽象的に把握された時間系列ではなくて、一日の勞働過程の中に時間規定が内在的に表現されてゐるのである。即ち、六時は搾乳時、十五時は家畜に水を與へる時、十七時は家畜が家に歸る時、等さいふ風に把握されてゐる。

又、オーストラリアのオランダ人は一日の時間分節として二十五の言葉を持つてゐるが、夫々の意味は例へば次の様なものである。

lantara 東の空に太陽の最初の光芒が見えた時

artjelmiwiva 太陽の光が段々こ明るくなつた時

inguntingunta 小鳥が囀り始める時 等。

同じ様な例をもう一つあげるに、同じくオーストラリアのビガンブル人は一年の季節をその時に花が咲く樹木によつて命名してゐる。例へば、

yerrahinda 花咲く時(九月)

nigahinda 林檎の花咲く時(クリスマス) 等。

かくの如く、子供の場合にもさうであつた様に、時間表象を抽象的、形式的に構成しないで、具體的行動的に構成してゐる。

又、子供の場合に時間が不連続的な系列であつた様に、原始民族に於ても時間は空間的に把握され、個々の具體的な事物として直観されてゐる。従つて、時間の流れはバラ

バラバラな斷續となり、個々の時間は互ひに中間的空間によつて分離されてゐるのである。

例へば、インディアンに於ては一年は十ヶ月さその他に二ヶ月さを持つて居り、この二ヶ月の間は年が死んでゐるさ考へてゐる。この時に彼等はアルガロボさいふ一種の豆を收獲し、大きな酒宴を催すさいふことである。

以上で大體分る様に、是等の原始民族の時間意識を見るに、形式的でなく感情的、行動的であり、抽象的でなく具體的、直観的であり、連続的なシエマでなくて、不連続的な實體的系列であるさいふ點に於て幼児の時間意識さ多くの共通點を持つてゐる。恐らく原始的な時間意識の構造はこの様なものではなからうか推定される。

(附記)本論文は主としてエルナーの「發達心理學序説」とカッツの「兒童との會話」とに據つたものである。(十四、三、二十六)

幼兒に對する數へ方の指導

東京女子高等師範學校訓導

田代順之

私の近所に大變教育に御熱心なお家があつた。長女に特殊小學校の入學試験を受けさせるさいふので、かね／＼其の準備を心掛け怠らなかつた様であるが、或晩御主人が倉皇として私を訪ねられ、「あなたは算術の大先生だま承つてゐるが、一つ僕の長女の數についての頭を診斷していただき度いと思つて參つたんですが」さいふこゝであつた。私は御主人の様子から何か特別な問題があつたなま直感したものだから、何か御不審に思はれるやうな事でもありませんたかま反問して見るま、御主人はいまも訝かし氣に、「親馬鹿さでもいふものか、今迄は自分の子供ながらさう馬鹿ものだまは思はなかつた。まところが昨日以來算術を教へて見て其の低能振りを發見し、受験を目前に控えてすつかり悲觀して了つたんです。事の次第は $\frac{1}{100}$ 、 $\frac{1}{100}$ 、 $\frac{1}{100}$ 、 $\frac{1}{100}$ 、 $\frac{1}{100}$ 、之は五から三をさるま幾つになるかまいふのだから、五から三をさつた答を此所へ書くのだよま等號の右側を指示して教へた

のであるが、さうした事からま書いてすましてゐる。之は大變だま何遍も同じ事を繰返して教へ、やつま覺えさせたま一安堵したのも束の間、一日經つた先刻例の引算を出したら又もまの木阿彌にかへつてゐる、僕もほま／＼呆れてしまつた。之で一體數の頭があるんだらうかま心配になつた。此の事實について子供の數的な頭を判斷して貰ひたいんです」さいふ話であつた。そこで私は「なにそんな事が出來なくたつて數理的な頭の働きを云々する材料にはなりませんね。そんな式を示して答を書かせれば五になるのが當然ですよ。」お客様は合點がいかないので不滿さうな様子である。私は言葉を續けて「キャラメルを五つ貰つたがもう三つたべて了つた。未だ幾つ持つてるるか。五つから三つを取るま幾つになるか。五から三を取るまいくらになるか。 $\frac{1}{100}$ 、 $\frac{1}{100}$ 、式を示して(五から三を引く意味を説明しても)答を求めたのまでは、難易に隨分の相違がある。殊に $\frac{1}{100}$ 、 $\frac{1}{100}$ の意味を不用意な取扱ひで、而も幼兒に對し

て其の急速な理解を要求することは、要求する方に十二分の無理があるを評さなければなりません。五から三を取るをいくらになるかと言葉だけで問ふならば未だしもですが、算式を見せた事それ自體が既に子供の頭の働きを別な方向に走らせるのです。幼児の推理、想像、理解をいふやうなものとは總て具體的であつて、必ず自分の體驗を而も極度に關聯づけられて行はれるのです。それ故に①②③④⑤⑥⑦⑧⑨⑩⑪⑫⑬⑭⑮⑯⑰⑱⑲⑳㉑㉒㉓㉔㉕㉖㉗㉘㉙㉚㉛㉜㉝㉞㉟㊱㊲㊳㊴㊵㊶㊷㊸㊹㊺㊻㊼㊽㊾㊿

を見せ置いて五から三を取るのだを指示すれば、兒童は如何にして三を取り去ればよいかを考へる。「取る」このの内容を具象の體驗に關聯づけて解釋すれば、取ることは即ち物を持ち運んで現實の位置を變更することにであつて、此の合點を①②③④⑤⑥⑦⑧⑨⑩⑪⑫⑬⑭⑮⑯⑰⑱⑲⑳㉑㉒㉓㉔㉕㉖㉗㉘㉙㉚㉛㉜㉝㉞㉟㊱㊲㊳㊴㊵㊶㊷㊸㊹㊺㊻㊼㊽㊾㊿に適用すれば、三を取ることは正しく式中の三を消し去ることに外ならない。それ故に式中の三を消し去れば残るものは五であるから、要は取るをいふこのの意味が此の算式を解く上にさう適用されるかによつて答が異つて來るのである。今坊ちゃんの場合を考へて見るに、今迄具體の事物乃至は言葉によつて數へさせてもそのを急に算式なきを示して、引算を要求するものであるから、既有的の經驗知識で「取る」意味を解釋し、それを適用して5の結果に到達した迄である。一度位教へたからさいつても其の算式の意味が子供に充分理解出來るやう、心理過程を考へ、それに應ずるやうな親切な指導過程工夫して教

へなければ、さう簡單に呑込める譯のものではないのです。お父様、お母様は果してどんな指導法を探られたかを承りたいんです。それは兎に角、幼児に算式を解かせようなんていふ舊式な算式觀ではいけませんね、數觀念を如何にして得させるかに主力を注がなければなりません。若し小學校の入學考査問題に算式を出すやうなさうした學校があつたとするなら、そんな學校へは子供を入れない事です。ね」と言ひ終るに、お客様は相好を崩して頭に手を擧げ「いやよく分りました。親が低能なのか子供が低能なのか分らなくなりましたな。ハハ……さういふ事で一幕が閉ぢられた譯であるが、一般的に觀て可成り之に類する指導が行はれてゐるやうである、以下其の例證を指摘しながら幼児の數觀念指導上の注意を述べて見ようと思ふ。

二

私は今迄入學檢定に際して屢々數觀念の調査を擔當しても見たし、入學當初の兒童の數觀念を調べても見たが、其の經驗から推して一般に抽象的な數計算の指導には相當力を入れてゐるが、根柢的な數觀念をしつかり得させるさうな方面の指導が案外疎かにされてゐる事が觀取される。殊に事象を數理で考査し、處理する態度の訓練に缺けてゐる。百まですらく數へられる。十以下の數範圍で抽象的な計算の出來るさういふ子供が、カードに丸い切抜色紙を色

々な排列に貼付け、それを瞬間的に觀察させて數を問ふて見るに、四の數の直觀がなかく出来ぬ。又等時的に聞く音ならば數へて幾つこ正しく答へ得るが、リズムの亂れてゐる音になるに四の判斷が甚だ不明瞭になつて来る。

オハジキを握らせて其の數を問ふて見ても同様、何れも數に對する感官の練磨が不充分である。幼兒に於ける感官は知能收得の唯一の關門たるは申す迄もないところであるから、數觀念を養ふ上から見てもつゞゞ此の方面に注意が拂はるべきだと思ふ。

かつての檢定に、五枚のカードにそれ／＼丸い切抜色紙を貼付けて一から五までの數を表はし、それを裏返して數系列に従つて一列に並べ、その數を當てさせた事がある。此の問題についての採點標準は五枚の中四枚當てた場合を滿點、一枚も當て得なかつた場合を零點として成績を五階段に分けた。考查の方法は初め、端から二番目のカードの數を當てさせ、後表の數の方を出して正否を確め、表を出したまゝ今度は他端から二番目のカードを當てさせ、前同様表を返して正否を確め、之も同様表を出したまゝ次は中央のカードの數を當てさせる。かくして左端、右端を順次當てさせ、全部を表返しにして終るのであるが、勿論最初に當てる一枚のカードは採點に入れない事にして置いた。數系列の頭に入つてゐる子供は五枚の中端から二番目のカ

ードを起して四であるに、他端から數へて四番目に相當する所に氣付き、以後は全部正しく當てゝふ、こころが百まですら／＼數へ得る子供でも、それが「イロハ」の暗記同様になつてゐる子供は、なか／＼數系列になき氣が付かない。従つて五枚の中の間234の三枚を表返しても未だ端のカードの數が當てられないさいふがある。こんなのは到底數觀念があるを見る譯にはいかない。

又或年には十種平方の紙を百の方眼に劃し、一方二十五種平方の紙を同様百の方眼に劃たものを用意して置いて、其の二枚を子供の眼前に並べ、小さな方の方眼紙の或一つの方眼を赤く塗りつぶして後、大きな方眼紙について之と同様な位置の方眼上に赤いサイコを置かせる問題を出して見た。此の問題は數の頭で處理すれば五迄の數觀念で容易に出来る問題であるが、否五迄の數觀念がなくとも對應關係でも容易に處理出来るにも不拘案外の不成績であつた。私は從來單一の入學檢定に於ける數方面の考查には五以下の數範圍を標準として、而も必ず直觀物を用ひて行ふ問題を選定してゐるのであるが、前述のやうな問題で考查して見るに成績に隨分の差等が明確に現はれる事を経験してゐる。

物の比較觀察なきに於ても數の方に著眼する子供は非常に少い。是等は平生の指導に於て數は數として分離された

指導を受けてゐる結果ではあるまいか、もつゝ兒童の全體的活動に數の方面が織り込まれて指導されなければならぬ。他所行の數、數のための數、全體的活動から分離された數の指導では實踐力の伴はない死んだ數知識の蓄積に終つて了ふ。それは決して根柢的な基礎教育者ではないのである。

數計算の抽象過程として誰もが指の使用法を教へるが、誰もが早く指の使用から離れさせようと思へる傾向がある。之は大變の誤りである。指の合理的指用法を研究して丹念にその使用法を指導しそれに馴れさせることが早く指から離れさせる最も有效な方法である事を思はない。數算が普通の筆算式暗算より如何に容易にして且つより有力の暗算法であるかは既に衆知の事實である。九から三を引く場合、右手の五指を左手の四指を想起し、左手の四指中三指を屈した後の指數を想起すれば難なく六が得られ、九から六を引くやうな場合、右手の五指を左手四指中の一指を屈した時の指を想起すれば之又容易に三が得られる。斯様にして指を用ひた數象を明確迅速に想起し得るやう指の使用法を計畫的に教へ、其の使用に馴れさせる事が最も早く指の使用から離れさせる近道なのである。

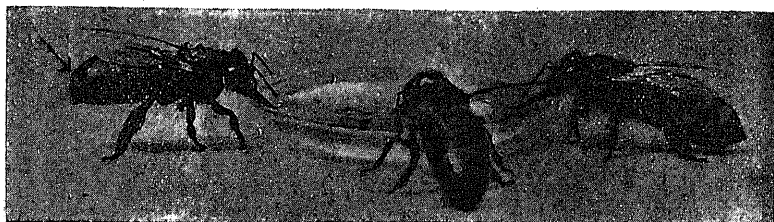
要するに幼兒の教育に於ては分離された分科的知識は絕對に之を避け、知識技能は飽迄具體的活動に統合されて取

扱はれなければならない。それが取りもなほさず、實踐力の伴ふ眞實の知識技能の根柢に培ふ所以であり、幼兒教育の基調をなすものと思ふ。單に數理方面の指導といふ立場からしても、尙小學算術書の根本的な刷新體系に鑑みしかあらねばならぬ事を強調しなければならない。

(四五頁より)

ふ。また遊具間の移動の場合断つて歩く子供が非常に多いので、ブランコの振動中に注意して特に片寄せること、本園の砂場の位置が、滑り臺と芝生の中間にある爲、砂場を通りぬけて芝生へ行く者があるので砂場の位置は最も、考へさせられる。

大略以上の様な結果を見る事が出来たが、外庭での遊びに主力を注いでゐる本園としては今後大いに右調査を基調として改善して、益々保育の充實、幼兒の保健に邁進し度い考へである。



蜜蜂の生活斷片

——蜜蜂が語る「言葉」——

東京女子高等師範學校教授

久米 又三

一
野山に花が咲き亂れると、野蜂の生活は急にいそがしくなつて來る。野蜂は云ふのは前にも説明した様に、既に巢の中で一定の勞働を終了してきたものであつて、愈々これから巢の外へでて、野外での勞働に従事しようとする働蜂共のこゝみである。野蜂共に與へられて居る責務は實に重い。彼女達は野にでて、彼女達の社會のためにパンを捜し求めねばならない。巢の中の數々の勞働とは異つて、野蜂の職場は時には荒れ狂ふ事のある自然の山野なのである。是迄に既に數々の勞働を身に體した彼女達には、生れたばかりの初々しい姿はさこにも残つて居ない。黒光りした背は、飽く迄自然の荒波に抗し、勞働の重荷に堪へんとする慥懔さを示して居る。

二

前にも述べた様に、野蜂の群は採集する食物の種類によつて二つの専門がわかれてゐる。蜜ばかりを採集する蜜係と、花粉ばかりを採集する花粉係とである。此の様な専門化が、さの様な原因で起つてくるのか良く判らないが、一度専門が確立されると、此の専門は嚴格に保持されてゆく。しかしながら時としては、社會情勢の變化に従つて、相互の融通が取計らはれる

ここもあるらしい。

そろ／＼野山に花が咲きさうになるに、ぎの専門に屬してゐる野蜂共も、絶えず誰かが巢の外へでて、糧食資源の偵察飛行を續けてゐる。相も變らず乏しい資源だけしか發見出来ない様な折には、巢の中に待機して居る仲間共は、歸還して来る仲間に対して何等の感興も起さないらしい。巢の中は、獵の乏しい折の漁村の様に極めて靜かである。

ところが、誰かゞ一度び豊かな獵を了へて歸つて来るに、不思議な「言葉」が仲間共の間で語り傳へられ、此の「言葉」を傳へ聞いた仲間共は、不思議な興奮に煽り立てられて、次から次へに新資源開發のために巢の外へ飛び立つてゆく。此の様なる者が、再び巢へ歸つて来るに、又再び不思議な嘯きが巢の中にひろがつて、騒々しい活動が一杯にみちてゆくのである。

三

人間でも満足な氣持で歩いて居る折は、其の足取りがどこもく變つて来る様に、胃の中に蜜を一杯吸ひ込んで、一目散に歸つて来る野蜂の姿にも、どこか様子の違つた所が現はれる。普通ならば、肢を後へさげながら飛ぶ所であるが、此の時には是を前の方へまげながら飛んで来るのである。かくして此の野蜂が巢へ舞ひもきつて来るに、待ち構へて居た二三の巢蜂共が彼女の周圍を取りかこむ。する

に彼女は、彼女の胃から先づ蜜を吐き出して、是を此の二三の者共に渡してやる。蜜をすつかり渡し終へた彼女は、宛も急に身の輕さを覺えたかの様に、つかつかに巢脾の面をのぼつていつて、そこらあたりに群つて居る仲間共の真中へ割り込んでゆく。群の中に居る二三の者共は、彼女が近づくのを感じるに、既に是は何事かゞ起つたものに違ひないに感づくらしい。彼女達は各々の觸角を彼女の方へ向けかへて、しきりに是を振り動かし始めるのである。群の中へ割つて入つた彼女は、入るや否や、宛も「蜜があつたぞ、あつたぞ」と呼ばはるかの様に、一種の戯けた舞踏を始めだす。

四

此の戯けた舞踏は、いつも型が定つて居る。足取り早くちよこちよこ小走つて、六部室ばかりの周りを丸く圓を描きながら歩くのである。かくして、大體一周りのちよこちよこ走りが終るに、彼女は急に向きを變へて、再び同じコースを逆の方向に向つて走り始める。時には一周りが過ぎて、二周りも廻ることもあるかと思ふに、半周りで又再び逆もぎりをして廻り出すこともある。此の様な舞が始まるに、其の周圍に居る蜂共はいささか興奮を感じるらしい。そして舞が進むにつれて、周圍の蜂共の興奮はいよいよ高められてゆく、彼女は興奮するにつれて、圓舞者に

ならつてちよこちよこ走りを始め出し、彼女のあみを追ひ

ながら、觸角を伸して彼女の臀部にふれてゆく。此の様に
して丸い圓の周圍を七八回も廻り續けるを、これで舞踏は
一先づ終りとなる時が多いけれど、一度の踊が二十周りも
續くこともあつて、普通ならせいぜい二十五秒で終る所
を、一分間も續いて尙ほ終らない様なこともある。又一度
の舞踏では不満足を見て、再び新しい場所へ移つていつ
て、こゝで他の蜂共に圍まれながら、同じ踊りを繰返して
ゆくこともある。多い時には、此の繰返しが六遍も續くこ
とがあるのである。

斯くして一渡りの踊が終るを、踊を終へた彼女はすつと
巢の出口へミ走り出す。するに彼女の後について走つて居
た二三の蜂共は、同じ様に彼女のあみを追つて五六歩も走
り出すが、大抵はこゝで彼女の接觸が失はれて、彼女だ
けが再び巢の外へミ飛び出してゆくのである。あみに残さ
れた二三の者共は、こゝで始めて夢から醒めた様に、じつ
とすくんでだんだんもこの平靜さに歸つて来る。ミところが
不思議なこゝには、二三分の後に最初の発見者が訪れた花
の處へ行つて見るを、巢の内に居た此の二三の者共がもう
既に、此の花へあつまつて來てゐるのである。そして、最
初の発見者と一緒に、せつせまこの新資源開發の仕事に従
つてゐるのである。

五

なにも知らない筈の仲間の者共が、最初に発見された其
の花へ、迷ふこともなくたぎりつくことが出来るまいふの
は、一體お互になにを噛き合つたためなのであらうか。多
分はじめの発見者が、その友達を花の所までつれてくるの
だらうと想像をされてゐた。ミところが實際に巢をよく見守
つてゐるを、その様な事は一向に見當らない。最初の発見
者はいつでも單獨で巢から飛びたつてゆくのである。さう
するに、秘密はいつたいこゝに隠されてゐるのであら
う。

彼女等がかたりあつた會話の暗號を、すつかりまきひら
くことはなかく困難な仕事にちがひない。だが、實際に
蜜の獵のすくない時には、獵から歸つて來たものは舞踏も
しないし、又これで刺戟をうけて外へミ出す者もない。
さうも秘密は舞踏の中にかくされてゐるにちがひない。し
かし、舞踏をする蜂には、花の香等が體にしみこんでゐるた
りするから、舞踏そのものよりも、舞踏によつて發散され
る花の香が仲間共を刺戟して、そして彼女達を巢からミ
び出さすのかも知れない。こゝで今、實際の蜜の代りに、
無臭の砂糖水を吸はせてやつたらさうだらう。ミところが、
砂糖水を吸つた蜂は、蜜を吸つたものと同じ様に、やはり
巢へかへつてから踊を始め。踊がはじまるを、仲間は興

奮して又同じ様に巢からこびだしてゆくのである。する
ま、舞踏者が發散さす嗅の様なもの、例へ意味があつた
ましても、兎に角別の意味のもので、仲間の者を動員さす
直接の原因は、さうも舞踏そのものにあるま考へた方がよ
いらしい。

まところが、砂糖水で發見者が踊り、仲間の者共が是に刺
戟されて外に飛び出した時には、彼女等が出るには出て
行先きを知らない。今、砂糖水を入れた數個の器を、巢の
周圍に並べて置いて、其の内の一つをある蜂に吸はせてや
る。その砂糖水の發見者が踊つて仲間の者共が飛び出す。
飛び出した者は、あらゆる方向に探索を試みるが、その中
のあるものがたまく、砂糖水を發見するまがあつても、
別に最初の發見者が吸つた砂糖水に特別に多く集るま云ふ
様なまはない。だから、舞踏は仲間の者共を動員はす
る。しかし其れ以上の告知はしてくれないま思はれる。
しかし乍ら、今數個の器に砂糖をいれて、その内の一個
に香料をさせた紙をまいてやる。そして是をある蜂に吸
はせて歸してやる。するま、仲間の者共は香料のある砂糖
水へはあつまるが、決して他の砂糖水を顧るものがない。
香料のあるま云ふ事が、結果を著しく變へさすのは何故で
あらう。此の場合に、あてもなく飛び出した仲間共が、た
ま香料のある所に、香料の香にさそはれて來たのでないこ

まは、前の實驗の時に二種類の香料を用意して置いて、
仲間の者共は最初の發見者が發見した方へだけ集るまここか
ら判斷が出来る。さうまするま、最初の發見者は。仲間の
者共に、砂糖水のわきにあつた香料の種類も知らせてやる
まになる。香料の香は、蜂が砂糖水を吸つてゐる間に、
蜂の體にしみこんだのである。此の蜂が巢へかへつて踊る
ま、香は體から發散する。發散した香を仲間の者は觸角に
ふれて、觸角を通して記憶をする。仲間の者共は、此の嗅
の記憶をたぎつて、發見者が發見した砂糖水へ到達するの
である。

自然の場合でも恐らく同じまが起つてゐるにちがひな
い。最初の發見者が、せつせま蜜をこつてゐる間に、花の
香は彼女の體にしみつて居る。此の花の香が仲間の者共
に記憶され、彼女等を導いて、最初の發見者が發見した花
へま向はしめるのであらう。

六

まところが自然は廣い。同種の花は到る所に咲いて居る。
漠然ま花の種類を告示されても、巢から飛び立つた者は迷
ふであらう。折角告示されるなら、何の種類の花で、しか
もまここに在る花であるかの告示が欲しい。此のためには、
發見者はもう一つの面白い工夫をこらして、仲間の者共を
迷はさないのである。

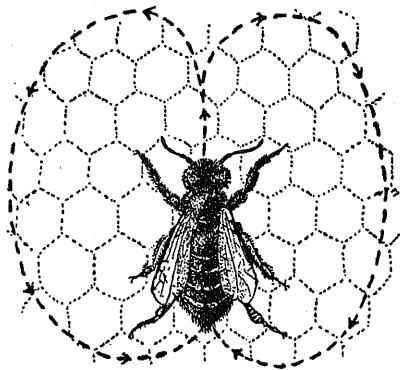
発見者が、再び巢から花へ歸つて来た時を實際に見て居るに、彼女は決して直ぐ様花にこまつて、早速蜜を吸ひ始める様な事はやらない。彼女は必ず其の前に、其の花の周りをぐるぐると舞ひあるく。舞ひあるいて居る間に、彼女は腹部末端の背中にある芳香腺をすっかり打ち開いて、花の上に向つて其の芳香を撒きちらして居る。此の芳香こそ「コ」だよ、「コ」だよと打ち振る旗の様に、新來の仲間共を近くへ近くへ誘ひ寄せて來るのである。だから、若し最初の発見者の臀部を、シエラックで造つた囊で被つて了ふに、折角花の側迄やつて來た新來者も、捜す花が何所にあるのか判らなくて、空しく其の場を引上げて了ふ。

七

花粉係の野蜂が豊富な花粉を発見するに、彼女は大急ぎで花粉囊を大顎で噛み切つて、中にある花粉を前肢でもつて押し出す。押し出した花粉へは胃の中になつさへて來た蜜を混ぜ込んで、彼女は是で花粉の團子をつくりあげるのである。かうして花粉の團子が出來上るに、彼女は是を花粉籠の中へ押しつけて置く。花粉籠云ふのは、後肢の脛の外側に平たく擴つた所を指すので、其の真中は多少凹んで居て花粉團子を巧く著ける様になつて居る。花粉を集めて居る時には、體中の他の部分の毛にも花粉が一杯つくわけであるが、此の様な花粉は脛の先にある節の内側に、刷

毛の様に並んだ毛で掃き集めて、是も結構花粉の團子に仕上げて了ふ。

かうして、兩方の後肢に花粉の團子を二つくつつけるに、彼女は是をお土産にして巢に向つて歸つて來る。巢に著いた彼女は、蜜係の蜂とは異つて急いで巢脾の面を匍ひ上つて、そこら中に群つて居る仲間共の中へこ割り込んでゆく。するに仲間達は此の突然の侵入者に多大の感興を持つらしく、しきりに觸角を振つて彼女の體に觸れやうとする。するに彼女はこゝで突然、頂度蜜係の蜂がやつたと同じ様に極めて奇怪な舞踏を始め出すのである。



り 踏 の 係 粉 花

しかし奇妙なこゝには、

花粉係の舞踏は蜜係の舞踏とは大分型がちがつて居る。彼女は先づ半圓を畫いて歩き出す。大體半圓の行進が終るに、やがて彼女は

急に最初の出發點の方に向つて、二三の部屋を横ぎる様に直線的に上つてゆく。かうして最初の出發點に到着するに、こんぎは逆の側に向つて半圓を畫いて歩き出す。此の半圓の行進が終了するに、彼女は再び最初の出發點に向つて直線コースを歩いてゆく。この様にして右半圓の次ぎには左半圓を歩き、左半圓の次ぎには右半圓を歩いて、結極半圓を反復しながら全圓をつくつて歩くのである。こころが尙ほ奇抜なここには、彼女が直線コースへやつて來るに、彼女は必らず臀部を振りながら歩くのである。

群集の中でこんな奇妙な舞踏が始まり出すに、群集はいさゝか興奮を覺へて來るらしい。數匹の蜂共は頭を舞踏者の方へ向けかへて、觸角を伸しながら舞踏者の臀部に觸れやうとする。舞踏者が歩くに、彼女達も亦續いて歩き出す。舞踏者が直線コースへ來て、臀部を振り始めるに、後肢にある花粉團子は遠慮なく彼女達の觸角や顔にぶつかつてゆく。御輿をかついで「わつしよ〜」と歩く時の様に、此の一群の蜂共は舞踏の興奮にかられて歩くのである。此の様な舞踏は長い時には數分も續く、舞踏者は一旦舞踏を中止するに、又別な所へ行つて新しく舞踏を始める。花粉の豊かな獵に彼女はすっかり酔つたのであらうか。

この様な舞踏が愈々終了するに、後について踊つた仲間

共は彼女から分離し、又再びもこの平靜にかへつて來る。舞踏した者は舞踏が終るや否や、花粉房へ入つていつて自分か携へて來た花粉團子をおさめて來るに、やがて一寸身纏ひして巢の外へこ飛び立つてゆく。數分後發見者が見付けた花を見守つて居るに、ちやんこ新來者が訪れて來て、蜜係の場合と同じ様に花粉の資源開拓に従つて居るのである。

花粉の場合でも、蜜の場合と同じ様な關係が成立して居る。發見者の踊る舞踏は、仲間の者共を動員する。花粉の放つ嗅は花粉發見の花の種類を明示する。そして發見者が再び花へ舞ひもぎつて、其の上で放つ放香腺の香は、新來者に對して花の所在を提示する。かくして彼女達の間に、此の不思議な「言葉」が誤りなく語られ、誤るこもなく理解されてゆくのである。

小學部入學檢定
に現はれたる
幼兒觀察の一調査

東京女子高等師範學校訓導

弘 田 芳 弘

二六

緒言

今般當校附屬小學校の第一學年入學志願者の選抜檢定中筆者はその直觀(觀察)力につき詳細に考查しその成績を通覽するを得たのである。故に以下その概要を記述し、最高年齢の幼兒としての百七十五名の觀察力の特質を吟味すると共に、小學校第一學年兒童の直觀指導の具體的資料をたいま考へる。

幼稚園保育の觀察補導は、小學校での觀察(直觀)の指導と甚だ趣を異にしてゐる事は存じて居るが、では實踐上の具體相如何なるに遺憾乍ら經驗を有たないから述べられない。しかし小學校だけの直觀について言へば、先づ何れいつても事物につき觀察しなければ眞正の研究ではないといふ事をよく兒童に體得させる事こそその觀察はあらゆる感官を通じ出来るだけ多方面に互る様にいふ事を目標として指導して居るのである。更に觀察の内容的方向として常に兒童の統覺發達階段に即して行ふ様心掛けて居るのであ

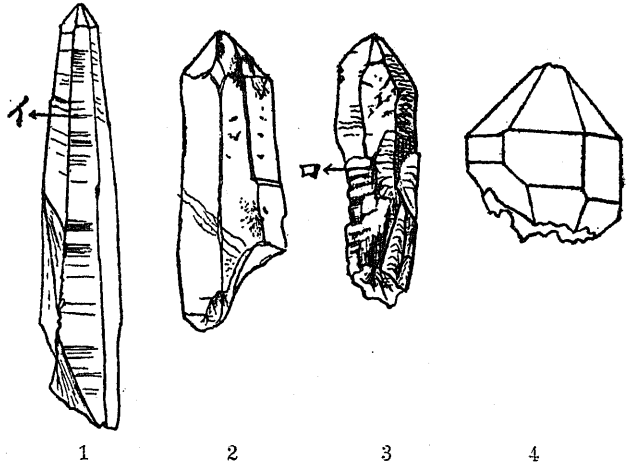
る。故に尋常一年頃の觀察は丁度事物期にある事として幼稚園年長兒も大體該期に屬する、觀察された事柄がみんなに個々分離された兎糞的なものであつても割合重要とせず、それよりは出来るだけ分量の多い、あらゆる方面を觀察する様に指導してゐるのである。この態度が、やがて兒童が二、三年の統覺活動期に入れば漸次活動する部分、作用への注視に轉換されるのであるがこの場合活動期としての觀察の良否は一に前の事物期に於いての充實如何によるのである。

この意味で幼兒の觀察補導に於ても、唯觀察繪本による多少歪められた自然物の觀察のみでなく、直接の自然物を手に持つて觀察する様、更に飼育し栽培しながら簡單な遊戲を通してのものであれば誠に事物期として申分のない發展を遂げるであらうと考へる次第である。

問題 I

昭和十四年一月二十六日調査 被調査者男兒七十五名

I 題 問



- 問題
- 一、「これはみなでいくつか」
 - 二、「この中からよく似たものをさうし二つ手に持つてらんなさい」(四個の中より比較選擇せしむる)
 - 三、「これ(一)とこれ(二)とのちんないところが両方とも

表一第 似居るものによる割合を擧げたる

筆者の妥當とせ るもの	計七五 (括弧内%)	當校附屬幼稚園 よりの受験者 二八名(括弧内%)	外部よりの受験 者四七名 (括弧内%)	四個なる 水晶を手 に持つて 比較した る者	1と2を 類似して せ	3と2	3と4	1と4	1,2,3
	55(73.3)	21(75)	34(72.3)	得た者					
○	30(40)	16(57.1)	14(29.8)	的に言ひ 比較した る者					
◎	41(54.7)	13(46.4)	28(59.6)						
○	11(14.7)	8(28.6)	3(6.4)						
○	18(24)	7(25.0)	11(23.4)						
×	2(2.6)	0	2(4.2)						
	3(4.0)	0	3(6.4)						

調査結果の總括を左に示せば

- 四、「これ(3)とこれ(4)とはちんないところが違ひますか、違ふところを皆言つてらんなさい」(相違點を比較せしむ)
 - 五、水晶中1の(一)の部分は稍々緑色がより居るも1,2共に半透明。3,4共に紫色なるも2の(ロ)の結晶面に黴皮多く茶褐色をなす。
- よく似てゐるか(抽象能力、類似點を述べしむ)
相違點、類似點を通じて妥當だと思はるゝ事項を擧げ得た數を得點數とした。但し五點を滿點とした故五事項以上の者は何れも五點を採點する。

何如點似類のと2と1 表二第

該類に 類似點は 何處に 擧げ得 たか (平均 數)	計 七 五 名	當 校 附 屬 幼 稚 園 受 験 者 二 八 名	受 外 部 者 四 七 名 よ り の		
1.7	42(56.0)	21(75%)	21(44.7)	る尖が先もと方兩	方り尖
2.0	38(50.8)	20(71.4)	18(38.3)	同が方れわの口斷じ	口斷
1.7	23(30.8)	7(25.0)	16(34.0)	で平が面もと方兩 るつるつ	面
1.5	14(18.8)	3(10.8)	11(23.4)	ほときすもと方兩 に色は又るゐてつ 似類のていつ	色
2.0	9(12.0)	8(28.6)	1(2.1)	ぐす眞るあがどか 等るあがじすな	稜
1.5	4(5.2)	4(14.3)	0	でスラかもと方兩 るあ	質物
2.6	1(1.2)	0	1(2.1)	るあて角六	他の其
	1.88 (131)	1.9 (總計53)	1.45 (計68)	得げ擧個何きつに人一 (數總)かた	

事物を手持たないで比較する態度はよくない。殊に觀察する物が立體的のものでは尙更そうである。この點より言つて外部受験者は三〇%が手に持つたのみであるのは多少場所馴れせぬ遠慮からもそうであらうがよくない態度である。

第三表 3と4との相違點如何及び總得點數

第何番 相違點 の平均 數	計 七 五 名	當 校 附 屬 幼 稚 園 受 験 者 二 八 名 よ り の	受 外 部 者 四 七 名 よ り の		
1.2	65(86.4)	27(96.4)	38(80.8)	ふ違がさ太	
2.2	28(37.2)	13(46.4)	15(31.9)	ふがちが色	
2.2	27(36.0)	12(42.8)	15(31.9)	ふがちが方れ斷	
2.6	20(26.4)	13(46.4)	7(14.9)	はしの面表	
3.0	13(17.2)	9(32.2)	4(8.5)	ふがちが方り尖	
2.1	6(8.0)	3(10.8)	3(6.4)	かうどがいれき	
4.0	3(4.0)	1(3.6)	2(4.2)	(さ重)他の其	
	2.16 (162)	2.78個 (78個)	1.77個 (84個)	個何きつに人一 かた得げ擧 數個總は内()	
		0	0	0	總
	1(1.3)	0	1(2.1%)	1	得
	9(12.0)	0	9(19.2)	2	點
	9(12.0)	1(3.6)	8(17.0)	3	
	19(25.3)	7(2.5)	12(25.6)	4	
	37(49.3)	20(71.4)	17(31.9)	5	

第一、三表を通じて見るに相違を見出す事よりも、抽象して共通の類似を擧げることが困難である事は、七十五名で相違點總計一六二個、一人平均二・六個を見出したのに比べて、類似點を見出す事は總計一三一一個、一人平均一・八八個といふ割合になつてゐるのでもよく分る。

相違點として誰もが注目してゐてしかも眞先に見出して

るるのは、4は太いが3は細いといふ事で外來者八〇・八％、附屬園九六・四％の者が直覺的に擧げ得てゐる。しかも平均一、二番だから、先づ第一番目に述べた者が悉く大部分であつて、他の色よりも何よりも直覺的に全般的の形の大觀について直覺してゐるのである。其の他の相違點となる多少見比べた上で考へて述べて居るので何れも平均番數が二番目から三番目前後である。最も困難である點としてはきれいかぎうか(六名)、重さの比較三名、四番目である。筋覺に訴へて重量の相違を見出した三名は甚だ優れた者と言はねばならない。

類似點の方では、兩方とも先が尖る、割れ方が斜め、かぢけかたが同じと言つた者が何れも約半數で、割合平易な分り易い點で、兩方とも面が平である(三三〇％)。透明度如何(一八・八％)を吟味した者は更に少く、稜について擧げ得た者はたつた九名にしか過ぎず、六角形であるのを數へたのは七十五人中唯一名であつた。

第二、三表を通じて幼兒の觀察の、一般的傾向を見てみるに、幼兒は大體輪廓的な外觀はよく觀察するといふ事が分る。即ち太さの違ひ(八六％)、類似點では尖り方(五六％)、斷れ方(五〇・八％)等で率の高い事はこれを示してゐる。しかし内容的、構成的な部分の觀察となるに稍々困難で、實際に4は大變きれいで3は醜いのであるがそれを相違點と

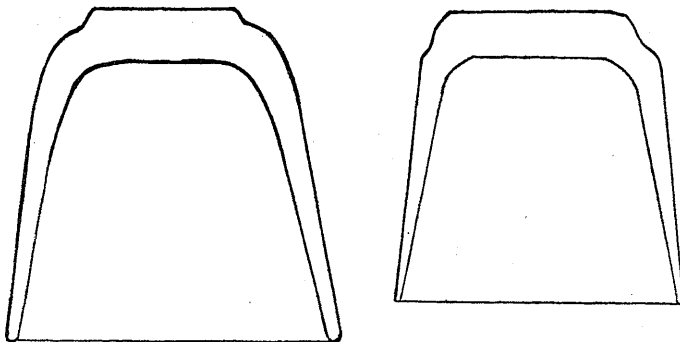
して述べてきれいかぎうかと言つた者が八％、その内容の他の方面よりの觀方として色の相違(三七％)、表面の状態(二六％)は低率である、又直覺的に分る太さの違ひを尙精細に吟味してみるにその構成要素として尖り方の違ひ(二七％)は擧げ得たが更に内部的に結晶面の相違等となるにそこまで觀察が及ばないのである。更に内部的構成的觀察に未だ充分でない例を、類似點の方でみるに構成要素としての面(三〇％)、色(二八％)、稜(二二％)、物質(五％)、六角(一％)の觀察が困難である事でよく分るのである。そこで若し水晶を幼兒に畫かせたらきつゝ影繪の様なものを畫くに違ひないと思ふ。その繪には誰も必ず尖るところ、割れた部分、太さ等は落さずに畫が面、色、稜等は現されないものになるだらう。右の調査結果より考へるのである。

最後に附言して置く事は、當校附屬幼稚園よりの二十八名が他の志願者に比して特筆に値する成績を示してゐる點である。これはその原因は一つには彼等は地の利を得て場所馴れしてゐるせいも有らうが、それよりもより重要な事は、入園に際して激烈な競走に既に大部分が淘汰された結果の極めての優者である事、保育に於ける觀察の適切な事であらうと思ふ。第二表には五點以上は表してないが、六個以上の觀察に更に點數を加へた結果はさなるに又

非常に距りが生じて来るのである。

問題 II
被調査者女児百名、一月二十五日

問題 II



一、「これは何ですか 何をしますか」
二、「この二つを比べてどんなところがちがふか、みんな言つてごらんさい」
次圖(實物大)の様な無色透明の二つのガラス製コップにつき比較して相異点を言はしめるのである。
そして擧げ得た相異の數を得點數としたのである。
次にこの觀察點の全般及びその遅

速度合ひを示してみる

第四表

比較(小學校児童)				答(た)番數 (平均)	被調査者 100名	觀察要項
六年女児 M.T子	六年女児 M子	三年女児 K子	二年女児 Y子			
②	①	⑤	①	1.44	43	へ答きつに小大者た
	③			2.56	48	者たげ擧を低高
⑧ ③⑤	⑥	④	②	2.88	79	較比の徑内の底
		②		1.72	43	い細い太
⑥	④	①	④	3.35	37	のさ厚のスラガ較比
① ④	⑤		③	2.21	46	の度曲屈の面側ひ違
⑦	②	③		3.11	26	較比の徑口
				3.83	6	少多の積容
				4.16	12	縁口のブツコ大有すき分部一に者たげ擧をのる
				3.5	6	ひ違のさ重
		⑥			8	他の其

この調査に於て二つのコップを比較して相違點を全く擧げ得なかつた者が二名あつた。「どんなところがちがふか」の意味が分らない程度の幼児でその中の一名は大コップを小コップの上にくうぶせに被せて後黙してゐたし、他の一名は全然一言も發しなかつた。

一箇所だけ相違點を擧げた者 六名

二點の者 十三名

三點 二十九名

四點 二十四名

五點以上 二十六名

この五點の中には相違點七八を擧げ得た者があつた。

最も容易であつたのは、糸底の口徑を比べてみるこ大コップの方が小さい事で、内をのぞき込んで居るこ、直ちに分る事であるから七九%の多きに達してゐるが、二、八八番目即ち平均第三番目に答へ得て居るから、よく觀てゐるこ誰れでも容易に見出し得た事柄であらう。直覺的に見出される相異は大小(一・四四)、太細(一・七二)で前者の方は大體眞先に答へ得てゐるのであるが、四三%しか答へ得てないのは不思議と思ふ。

最も困難な點は大コップの口縁に一ヶ所大へん小さな凹んだところがあるが、小コップには無いのを見出す事であらうたつた十二名でありしかも四・一六番目だから、四、五ヶ所以上相違點を見出す優秀者のみが色々各方面から觀察した末、やつこ氣のついた事柄である事が分る。

この幼児の觀察を小學部二、三年兒童の中等兒こ比較して見るこ全く大差のない事が第四表比較にて分るので、吾々が試みに考查されたこしても餘り澤山見出す事は出來な

いと思ふ。しかし高學年に進むこ六年女兒の如く唯糸底の部分の觀察に於ても各方面より見て居るので、唯底の丸が大きい小さいのみでなく更にこれこ連關して上からのぞき見て側面より、底面よりながめてその相違を述べて居るのである。

これ等の觀察の結果、事物期こしてその個々物につき枚擧、羅列する事は、大體幼児でも兒童でも大した變りは無い事が分るのである。そこで事物期こして出來るだけ多方的に數多き觀察をなし得る様に指導して該期を充實して置く事は次の活動期、性質期への發展の基礎こなるこ考へるのである。

結言

以上二調査を通じての結果をそのまま現す事に務めたのである。幼児保育に無經驗の筆者には、勝手な解決を下して觀察の趨向の大觀をする事は出來ないからである。故に大方の御適切なる御判斷を御願ひする次第である。

巨人物語

東京女子高等師範學校教諭兼教授

石井庄司

三二

巨人物語云へば誰でも直ぐにガリヴァー旅行記の大人國の話と思ひ出すであらう。ガリヴァーは東印度への航行中難船して、プロブディングナグといふ大人國へ行く。そこには身の丈六十呎に及ぶ人間が住んでゐる。ガリヴァーは此處で色々恐ろしい目に遭つたり、また面白い事に出逢つたりする。一體プロブディングナグといふ大人國は何處にあるのか尋ねべくもない。しかしガリヴァーは三度目の航海で、空中に浮遊する飛島ラビュタに行き、それから魔法使の島や、不死の人間のゐる國を訪ね、のち日本に立寄つて歸國することになつてゐる。大人國のプロブディングナグも案外東洋の日本あたりの話がある暗示を與へてゐるのではなからうかと思ふ。かういふ結論は、容易に出来ることではなく、多くの學問的な研究に俟たなくてはならぬのであるが、こゝに我が古典の中にある巨人傳説について世の注意を喚起してみたい。西洋の話ださばかり思ひ込

んでゐたものが、思ひもかけぬ自國の古典の中に見出されるのは、興味あることではなからうか。

それは常陸風土記の那賀郡の條にある左の記事である。ひらつうまや平津の驛家の西一二里に岡あり。名を大櫛おほきといふ。上古いにしへに人あり、體極めて長大おほほに身は丘壟かみちりの上に居りて、蟹を採りて食ひき。その食へる貝、積聚りて岡つもと成りき。時の人大きに朽ちし義ごころを取りて、今大櫛の岡おほきいふ。その大人おほびとの踐ふみみし跡は、長さ三十餘歩、廣さ二十餘歩あり、尿うりの空址あざは、二十餘歩ばかりあり。

「平津の驛家」いづつといふのは、註釋によるに、平戸、大串の二村のあたりで、今茨城郡に屬してゐる由である。大串村の西隣の東前村に池があつて、これが尿の跡であるなごさまことしやかに記されてゐる。風土記の此の記事は、上代に於ける貝塚かみちりといふものの觀念を明示するものとして、その方面の人々には既に注意されてゐる。しかしこれを巨人傳説おほびとといふ方からも見て與あるものである。巨人が丘の上

に住みながら海岸の蟹(はまぐり)の古語を採つてたべたさいふのである。貝塚の成因をかかると巨人の生活のあこさまたのである。巨人の足跡について「長さ三十餘歩、廣さ二十餘歩」といふ「歩」は尺度の單位としての「間」をいふので足跡は三十間に二十間あつたさいふのである。なほ尿の穴址を「二十餘歩」といふさまきの「歩」は「坪」をさすもので二十餘坪の廣ささいふことである。巨人の足跡については、美濃古蹟考さいふ本にも、近江の琵琶湖を一跨に跨ぎ越えたさいふ巨人の足跡が、石津郡大清水兜村さいふ處にある由である。

私が子供の時に、母から聞いた話に、大和の畝傍山を可成山を天秤棒に擔いで持つてきた大男があつた。暫く休んで、また擔がうさ思つて、ヤツミ聲をかけて擔ぎ上げた處が兩方の荷が重くて、ギーツミ棒が折れてしまつた。「ヤ」ミいつて、「ギ」ミいつたので今の八木の町が出来たので、そのさま大男の膝を突いた跡が畝傍山や可成山のそばにある池であるさいふやうな事を聞いた。これは「八木」さいふ地名説明の單純な傳説であり、また一口噺に過ぎないものであるが、畝傍山や可成山のやうな形のよい美しい山を擔いできた巨人があつたさいふことは、子供心にもなんさなく面白く感じたことであつた。

かういふ巨人傳説は、日本の各地に傳つてゐるのではな

からうか。風土記の中では、播磨風土記の託賀郡の條にも見えてゐる。

託賀^{たか}名つくる所^{ゆゑん}には、昔大人^{おほびと}ありて常にかがまり行けり。南の海より此の海に到り、東より巡り行きし時、この土に到來りて云ひしく、他し土は卑ければ、常にかがまり伏して行きしに、この土は高ければ伸びて行けり。高きか云ひき。故^{かれ}、託賀の郡さいふ。その躰^{ぶた}みし跡處、數々沼さなれり。

これまた「託賀郡」さいふ地名の説明であるが、巨人の足跡が數多くの沼さなつた説明してゐるころが多い。本文に「南の海より北の海に到り、東より巡り行きし時々」であるので、井上通泰博士は、「此大人は、天日槍命の面影を傳へたるならむか」言つて居られる。(播磨風土記新考四一三頁)天日槍命^{あまのひさののみこと}のことは、播磨風土記には度々出て來る。命は韓國から渡來せられた神様である。天日槍命は垂仁紀の一書の記述によるが、崇神天皇、垂仁天皇時代の人さいふことなる。さうして來るが、常陸風土記にみえる大人を播磨風土記に見える大人は聊か性質の違つたものやうである。即ち前者は原始民族或は先住民族であり、後者は新來の英雄をさすものである。共に巨人足跡傳説の文獻をみるころが出来やう。

さて我々は、このやうな巨人傳説を子供の世界に如何に生かすべきであらうか。

夕御飯が濟むと、子供が傍の柱により添つて直立不動の姿勢をとり、頭を真直にし、顎をぐつと引いて、苦しきうに「お父さま、背を測つて下さい」といふ。するに次の子供も負けずに出てきて、「お父さま、背測つてちやうだい」といふ。「こんなに高くなつたよ」といつて、頭をさすつてやるに、面々大よろこびである。ところが今度は「お父さまの背を測つてあげませう」といふことになり、兄弟二人がかりで椅子を持ち出し机を持ち出して、自分より遙かに高い父の背丈を測るのに大活躍をする。思ひきつて背のびをするに子供らにはいよく手がまきかない。こんな時に大男の話を出してみる。

「お父さまより、もつともつと大きい大男、百倍も二百倍もある大男がゐたんだよ、ここからお茶の水の幼稚園ぐらゐるまでは、ひよいと一またきさ」といふと、ウエーと驚いて、何も無いのに天井を仰いでゐる。自分が歩いて行くに二十十分も三十分も要するところを一とびと聞いて驚いたのであらう。そんなに背が高いだらう。天まで届くだらうと考へてゐる。するに長男が獨言のやうに口を切つた。「そんな大きな大男のはいてる靴、みんなんだらうな」と。そりや

大きいよ、講談社のお家より大きいよ」と出鱈目を言つたところが、子供にはよくわかつたらしい。堂々たる七階建のビルディングより大きい靴を履いてゐる大男、かういふ大きな靴を履いた大男が、ドシン、ドシンと歩いて行くに大變だらうなと思ふ。こんきは次男がきいた。「大男の帽子、そんなに大きいよ」「さあ」と言つたきり、流石の父親も少々困つたが、いつも此の子が鳩ボツボの豆をやりに行く、護國寺の本堂の屋根と言つたら分るだらうと思つて「大男の帽子はね、護國寺の青い屋根より、もつと大きいよ。それから大男の帽子は、鐵兜だよ」と言ふと、早速長男は乗出して「大男は、出征するんですか」ときく。「さうだ、さうだ、大男が出征して、バイヤス灣に上陸したんだよ。」「ウー」と手を拍つてよろこんでゐる。かうなるに占めたものである。話はいくらでも出て来る。

「大男が大きな靴を履いて、ドンドン廣東へ進んで行つたのさ。するに支那兵の造つておいた鐵條網やトーチカをみんな靴でふみにじつてしまふ。そのあとから日本の兵隊さんがグン／＼と従軍して来る。大男が背のびをして、すつと見渡してゐるに、向ふの川の岸に澤山の敵兵が集つてゐる。そこで大男は、川を一跳びに越して、敵兵の後に廻りちよ／＼と靴の先で掃ひのけるに、敵兵はみんな川の中へ蹴飛ばされてアップアップと流れて行く。もう敵はる

ないかなと思つて、よく見るを、向ふの山の蔭に一箇師團ばかりの敵兵がかくれてゐる。よしと思つて、長い手をにゆつこ出して、さつこ掻き集めてこちらの川の中へ捨て、しまつた。……こんどは日本の戦車隊は、橋が落ちてゐて困つてゐるから、ちよつこ待つて下さい、いまみんな渡してあげますからさいつて、戦車を二臺も三臺もちよつこ掌の中に入れて川を渡す。こちらでは重い大砲を運ぶのに困つてゐるので、エ、面倒臭いさいつので、兩掌の上に乗せて一度に五門ばかり一時に運んでしまふ。……」

かういふことを言つては餘りに荒唐無稽であるとお叱を受けるかも知れないが、兎に角愉快な話である。スキフトのガリヴァー旅行記には當世に對する諷刺があつた由であるが、我々の古典にある巨人傳説はまことに無邪氣で、本當の子供の生活が出てゐるやうに思ふ。もつこよい話がいくらも出来ると思はれるが、今回は、以上のやうな紹介だけで御免を被むることにする。(三月二十四日)

○
季節々々につけて思ふことですが、春は特別に野山の自然が思出されますね、あの豊富な自然、自由に眺め楽しむことの出来る自然、採るに任せ摘み放題といつた自然、羨ましいのは、そういふ處で日々遊びくらす子ども達です。といつて、そういふ思ひのまゝに、子どもを連れ出すことも出来ません。そこで、出来得ることはといへば、自然を幼稚園へ運び入れることです。自然々々といふと大そうですが、草の花でよし、木の芽でよし、根があれば尚よし、土が附いてゐれば此上なし、一々立派なものでなくていいのは勿論です。大人に見せるためになし、風流ですることなし、寧ろ、名もないやうな、なんでもないやうな、普通ありふれた自然こそ、子どものものでしての自然にふさわしいのです。野山へ連れて行つたつて、そういふ自然にこそ親しみをもつ子ども達です。

尙ほ念の爲に申添へるが、之れは「觀察」のためではない。そんな目的を立てることなく、たと、可愛い子ども達に自然を與へたいだけの心からです。春は春の幼稚園らしく。(草象)

給食と幼稚園

大和郷幼稚園 坂内ミツ

昨年と今年だけの極めて貧しい経験であります。十二月から三月までの冬期中、お辨當の時に味噌汁を一椀つゝ、與へました。其理由は、過般幼児のお辨當のおかずを調べていたゞいた處、肉類、卵其他動物性のものが多く、野菜が少ないので、もう少し野菜を食べさせ度い事、寒い時

せて暖かい汁を吸はせ度い、飯を温める装置が不完全な爲め、こいふ單純な考へに過ぎないのであります。けれども榮養の事は充分に考へて、毎日の獻立をば香川先生にお願ひしてカロリーを計算していただき、汁のだしにもジミール等を使用して注意は怠りません。其結果としては大したものではなく、家でも味噌汁を食べるやうになつたさか、人蔘を食べるやうになつたさかいふ位ですが、一般に喜んでよく食べる事は事實であります。味噌汁を作る手数をかける位なら、いつそ給食して貰ひ度いこいふ希望でありました、そこで給食について次のやうに考へて見ました。

給食の目的

一、科學的な立場 榮養學上から考へられた獻立により、年齢相當な質と分量を與へ偏食を矯正して理想的な健康體の子供とする事

二、社會的の立場 兩親が無教育の爲、或は貧困の爲め又は母親が忙はしい職業に就て居る爲めに、お辨當の世話が届かず、有り合せの粗末なおかずを入れて間に合せねばならぬ子供、毎日ノ、パンばかり持たせられる子供等に對し榮養食を與へて健康兒を多くし健全な國家社會をつくる爲

託兒所や保育園で實施されて居る給食は主として第二の目的に添はんが爲めであります。託兒所では當然給食すべきもので、身體方面の養護の爲大に力を入れなければならぬ事だと思ひます。所が現在の私の園では其必要を認めません、寧ろ弊害があると思ひます。

辨當は母親の手で

實際にお辨當をつくる事は母親の重荷であります。毎日

毎日頭を悩まして子供の好むものを、榮養價のあるものを、分量も丁度よいやうにこ、一方には經濟上の事も考へねばなりません、自分の生活費から割り出してそれ相當にしなれば續きません。又同じ經費でも材料の選び方によつて榮養價に大差があります。假令ば日の丸辨當にしても、白米に梅干を入れただけでは榮養分が足りません、之と同じ經費でも胚芽米に「アミ」の佃煮をご飯の真中に入れて日の丸辨當をつくれれば、榮養は満點である。或醫學博士の方は申して居られます。其他いくらもさうした例はありません。食慾が無くなつてしまひます。考への深い人程むづかしいのであります。其むづかしい事を母親が一生懸命に誠意をこめて子供の爲めにつくる處が貴いので、子供も亦感謝していた。よく事が出来るのであります。或女の子でしたがお辨當の相圖がある。第一に早く用意を整へキチン。机に向つてニコ／＼して居りますが、おそい人を待つ間時々おかす入れの蓋を取つて見て、「今日はお卵さ小聲でいつてはニコリします。其顔の嬉しさうな事、其時の其子供の心は神に近いものだと思ひます。又稀には「先生今日のお辨當はお母さんがつくつて下さつたの。嬉しいな」さわざわざ先生に話して喜びを分たうとする子供さんもあります。喜んで食べてこそ榮養分が吸収されるのであります。如何

に多くの榮養分を含んだ食物を口に入れてもいや／＼ながら呑み下したのでは吸収される處は極めて少いのであります。普通の家庭ならば子供の辨當をつくる暇がない。いふ筈はありません。不幸にしてつくつてやらぬ母親は給食して貰う事を感謝するに相違ありません。心の内では子供に詫びて居る事でありませう。給食する方でも其氣持を察して親切に考へた獻立によつて親切に取扱ふべきだと思ひます。數が多いからこゝ機械的になつてはなりません、お辨當は單に身體の糧であるばかりでなく、同時に心の糧であります。お辨當はさうしても母親の手でつくらなければなりません、此意味に於て幼稚園では給食する必要がないと思ひます。昔の母親は子供の食物の事は申すに及ばず、シャツ一枚でも人手にかけず夜の目も合さず自分の身を顧る暇なく子供の爲めに盡されたのであります。今は衣服類すべてデパートに行けばすぐ間に合ふので、金さへあれば事缺かぬやうになつたので心の入れ方が足らなくなつた爲め、子供も亦感謝の念が薄くなつたのではないかとさへ思はれます。其裁縫する時間、つぎものをする時間は現今では何に使用されて居るのでありませう。子供の學校參觀等にも使はれませうが、幸に母親自身の修養の爲めに又社會奉仕の爲めに使はれるならば此上ない幸福であります。

若し幼稚園に於ける給食が第一の目的にのみ依る。とする

ならば、第二の目的を考慮せず、純粹に科學の上に立脚して行はれて然るべきものと思ひます。けれども實際にはな

か、理論通りには行かぬと思ひます。子供の食欲には大にむらがあつて或時は驚くほど大食かと思ふ、或時は極めて少食で、別に空腹を感じないしおなかもこはさないのは、自然の要求かと思ひます。おひるのお辨當の時でも其前の運動等の加減で食欲の出ない時もあります、つけられた分は残してならないといふのは無理な注文で、實際行はれません。統計を取つて見ても完全な結果は得られないのであります。又持つて生れた體質によつて要求するものが違ひます。それを同一に取扱つて同じ質のものを食べさせる事は感心出来ません、それも三食を通してならば結果が現はれませうが、一日に一食だけが科學的に與へられても他の二食が科學的になつて居らねば完全な結果を見る事は出来ません。又家庭に於ても獻立に困るのであります、幼稚園でいたゞくお晝の獻立が知れて居るにしても分量まではつきりわかるわけには行かず、子供が一人ならば何さか出来ませうが幾人かの子供がお晝に別々のものをいたゞくすれば、夕食の獻立をさうしたらよいかむづかしい事になります。若し又給食された獻立がわからずに夕食をすれば、肉が重つたり野菜が多くなり過ぎたり、却つて榮養的でなくなる憂があります。科學的に結果を出す事は至難な

事でありませう。

榮養不良のために病氣になる子供もあれば、榮養過多の爲めに短命に終る人も無いではありませんが、榮養不良といつても榮養を採らなかつたといふよりは、食べても食へても榮養を吸収する事が出来ない爲めに不良に陥つた例の方が多のであつて、東西古今時と所によつて食物の種類が異り調理の方法も異なるのでありますが、大した不都合なく相當に成長するものであります、美食する人、大食する人必ずしも良い體格でなく、必ずしも體力が強いといふでもありません、神の御旨の宏大なのに敬服する外ありません。けれども幼児は成長して行かねばならぬのであります、原料を用ひず建築するわけに行きません。骨となり肉となり血となり原料として食物を採らねばなりません。其子供の體質を知り氣質を知り適當な食物を與へるのは母親において他にありません。食物の事だけは人に委ねる事の出ない母親の義務であります。不幸にして給食を受けねばならぬ不幸な子供がありました時は、母親になつた心で誠意をつくして考へていたゞき度い、機械的に陥らないやうにしていたゞきたいご希望して已まない次第であります。

その頃

「過去をして過去を葬らせよ

いそしみ働け 現在を

潑刺たる現在の生活に いそしめ」

昔の人の詩句には反す事ながら、さもなくも歩み來し保育二十五年の細く長き小道を振り返り想ひ起す事ひこつ、二つ、朽葉色の落葉でも腐葉土になつて若芽を育む事もやま、後前もなくかきつらねてみました。

その頃(天正三年)の園兒は、男の子は詰衿の學生服又は紺がすりのつつぽの上に白いエプロンをかけ、女兒は元祿袖の和服又は洋服の上に、胸にレースがあつたり、肩にリボンや飾りが蝶の羽のやうについた白いエプロンをかけてゐた、履物は靴、草履も少數あつた、先生(保姆)は和服に袴で履物は靴、掃除(朝晝午後)の時、粘土の時は襪をかけた、若い保姆の袂には、必らずたすきの玉が一つや二つは、は入つてゐた。その頃の組の名稱は、一ノ組、二ノ組、三ノ組。三ノ組には三年保育の年少兒(四歳、五歳)

K 子

かし十八名か二十名。二ノ組は二年保育の初の年五歳六歳兒ばかり三十名、一ノ組は二年保育の二年目、三年保育の三年目、(六歳、七歳、三十名ほど)。

一組一室で、机腰掛は、相互中心主義に考案せられた扇型で集める大きな圓形になる最新式のもの、長方形のテーブル式のもの、又机面にたてよこの線のは入つたもの(フレイベルの恩物を取扱ふ爲)等があつた。

その頃の先生(保姆)は八時始業の時は七時前に門の開くか開かずの頃に出勤、まづ襪がけになつて、保育室の窓の開け方にも心じて、から拭き清拭き或は水拭き、塵が清まる、繪本玩具の配置、當日の觀察手技材料の用意もすませ、さあ何時でも待ち受ける頃早く登園の子等一人二人集ひはじめ、花瓶の水換へを幼兒と共にする。

時報は電鈴でなく小使の打ちふるベル又は拍子木の音(現在芝居の開幕の時に使つてゐるもの、但し打ち方は違ふ)毎朝一定時に全園兒が集つて圓になり朝の挨拶の歌を、そ

れから二三、唱歌か遊戯をして各お室に分れる。各保育室でお鼻汁の掃除や爪さりと整容をして、家庭幼稚園往復用のエプロンと幼稚園内用のエプロンをかへ、廣い遊戯室には入る時、新入園児の中必ず三四人は廣い室には入るのをいやがつて泣いた、さうでなくとも、家へ歸りたがつたり、附添ひを慕つたりして泣く子があり、それが淋しげな顔をした子に傳染し、三ノ組の先生は四月五月は、いつも負ふた子に抱いた子さいふ形であつた。

その頃の保育室での仕事は「ヒゴ」に腕藤豆を通す豆細工、四角又は圓形の色紙を折る摺紙、「むぎわら」や紙を「ヒゴ」に通すつなぎ方、鋏で色紙を剪る剪り紙、粘土、お話し、唱歌遊戯 觀察(王として動植物自由畫は石筆で石版に描いた、たまには鉛筆色鉛筆も使ふた。

運動場には一人乗り又は二人、四人乗りのブランコがあつた其外幼児は先生のお手傳ひで花壇の手入れ、小鳥の餌の世話、金魚の水換等をした。出した玩具をかたづけ、手を洗ひ朝着て來たエプロンに換へて歸るお仕度が出るまで「今日のけいこもすみました」さいふ唱歌をしてさよならの御挨拶になつた。お辨當入れは、たてに上下に重つた圓いものが多く、食後含嗽をする齒の衛生は其頃から幼稚園では習慣付けられてゐた。砂場の道具、シャモジ、シャベル、「ふるひ」なごは現在に變りなし、積木は箱に入つた小さいもの

が一般に用ひられてゐた、繪本はコドモ、コドモノクニ位で種類が少く、飯事道具も人形も家庭向のものはあつても幼稚園で多數の幼児の使用に適したものは少なかつた、その頃はモンテッソーリ教育法の研究も應用が盛であつた。

大正五、六年になつてクレイヨンが出來自由畫が獎勵されて幼児の描畫に一新期を來し、つゞいて塗繪が盛になつて來た。此頃積木には、ヒル氏の積木が紹介され、床上積木が出現して來た、大正七、八年頃から街の辻々で飴賣りの紙芝居、細く云へば紙人形の芝居は盛であつたが、ギニョールの様な立體人形の保育室に現れ活躍しはじめたのは關東震災後の事、滑り臺、粹昇り、メリーゴラウンド等の運動具が幼児の戶外生活を楽しく活々させたのも、震災後の帝都復興も歩調をそろへてゐたやうに思ふ。幼児の身體も同じ位又それ以上の大きさの箱積木、ここにそれを板も組み合せて使ふ時、幼児達は自分の手で、力で、お友達と一緒に、門や橋や家やを組み建て、それをくぐり、渡り、乗つて遊べるので、亂暴になりがちな男兒の遊びは、注意深く組み建てを考へる事に、又自分だけで及ばぬ事を協力して仕上る事に、眞剣さ潑刺さを加へてグン／＼發展して行つた。此頃から自由遊の指導が一般に重要視される様になつた。大正十三年以後、幼児の服裝も、先生(保姆)達のもみる／＼洋服化して來た。一方にはダルトンプラン研究

の聲もあり、幼児の遊びを計画的に、有目的保育へこいふ倉橋先生の理論的なお話が具體的な保育内容になつてドシドシ發展した、幼児の毛筆は大正の半頃から、木工は大正の終り頃から幼児保育に實際化して來て、幼稚園の子供の生活は益々内容が豊になつて來た。

その頃(大正三年から十五年)の幼児、否、園児は新入期によく泣いた、そして自分の思ふやうに描寫出来るのは小學校には入る前の年の二學期終り頃から(例外はある)であつた。

現在の園児は新入期に泣くのが少い。自分の思ふやうに描く事は小學校には入る前の年の一學期はじめ頃から出来る、文字數字、實數に對する興味が早くから出る、智恵づき方が大層早くなつた。社會問題、時事問題を心にこめてゐる。目にうつる體格のよしあしはさしてわからぬが、その頃には聞いた事もなかつた幼児の病氣が近頃増した。中耳炎、百日咳、自家中毒症、嗜眠性腦炎等。

その頃の幼児は、既に成長して、現在大陸日本に働いて居る。

その頃の私は、世に母さへあれば幼稚園は無くともよいと思つてゐた。

現在の私は、幼稚園が無ければ國民教育の基礎は完全し

ないと思つてゐる。

(四九頁より)

事でした。この方法を案出したあの子は、後には疊一帖もある大きな自動車を、巧みな曲線で描き出す技術を習得したのです。家の者達は一錢銅貨の蒐集を消滅に心を使ふ日が續きました。毎日新しい觀察が追加されて、細部から細部にわたつてゆきました。いゝ自動車が出来る毎に悦に入るこいふ具合でした。それが一通り済むと、今度は紙で自動車の形を切り抜き、扉や窓を開閉出来る様に、あの子の技術には過ぎる様な問題を解決しようと思ひます。自動車の玩具もなか／＼氣に入るものがありませんでした。自分の興味本位に生活を築き、自分の學習のプランを追つてゆく事が、あまりに濃厚なあの子は、仲々扱ひ難い子でした。幼稚園に入れて頂いてからは多方面な豊かな刺激も與へられ、様々な個性にも接し、團體的な訓練も受けたせいか、あの子も圓滿になつて來た様です。而し幼稚園の様に自由な所でさへ、自分の興味を幼稚園の日課との間に幾分の不調和を感じてゐたらしい様子が見えます。小學校に入つて、一層一定の教育課程を踏まなければならぬ。あの子は、この様にして調和を見出してゆく事でせうか？。

園庭に於ける遊びと動きの調査

感應幼稚園 青柳節子

四二

園庭に於ける園児の自由遊びは、その文字の示す如くに自由奔放であつて、保姆の、誘導乃至指導を云はれるやうな子供への働きかけが最も少なく、子供自身で、自由自在に駆けまわり、次々に遊具を代へて遊んで行く。従つて、その遊びにも、遊びのグループも雑然とし、集合離散が激しく、一人々々を観察する場合は、誰れも彼れも、精一杯元気に遊んでゐるこゝだけは解るが、多数の園児が入り亂れて遊んでゐる全體を眺める場合は、實に雑然としてゐて、観察するにしても、掴み處がなく、漠然とした感じである。

然し、自由奔放な園庭に於ける自由遊びにも、何か特徴があり、また備へられた各種の遊具から、遊具へ移つて行く子供の遊びにも、一定の流れをも云ふべき法則の様なものがあるこゝが考へられるのである。此の調査はそれ等の特徴なり、法則なり、を發見し度いこゝ考へて實施したものである。斯うした方面を研究調査せられたものが、他にも

種々あるこゝも、思ふが、園庭の坪數、園舎の場所、運動具の配置並に利用する園児數等々、その情況に依つて、調査の結果も異つて來ると思ふ。御參考までに本園での調査の結果を發表させて頂き、併せて諸賢の御意見を伺はせて頂ければ誠に幸ひである。

調査は六月と九月の二回實施したのであるが、その結果は大體同じであつて、特に異つたものが發見出來なかつた點から見て、本園々庭に於ける平常日の自由遊びの調査をして、稍々正しいこゝが實證出來た、便宜上六月下旬の調査だけを此處に掲げるこゝにする。

調査は、晴天微風、室温三十二度、園庭樹蔭三十度、汗ばむ梅雨の時期である。新入園児も幼稚園の生活になれ、團體的な訓練も一通りは出來た頃で、自由遊びも活潑で、一人でぎんぐ遊んで行くやうになつてゐた。然し、調査當日は、平常相手になつて遊んで下さる先生が、成るべく、子供の自由意志に依る遊びを調査したい爲に、積極的

に遊びに加はらなかつたこと、調査記入の役目のものが、一定の配置に着いて立つてゐたので、子供も初めは一才異様に感じたが、適當に説明して調査を意識させないやうに努め、調査記入の正確を期したのである。

一、園庭の概略

調査に必要な園庭と運動具の配置を左に大體述べることにする。

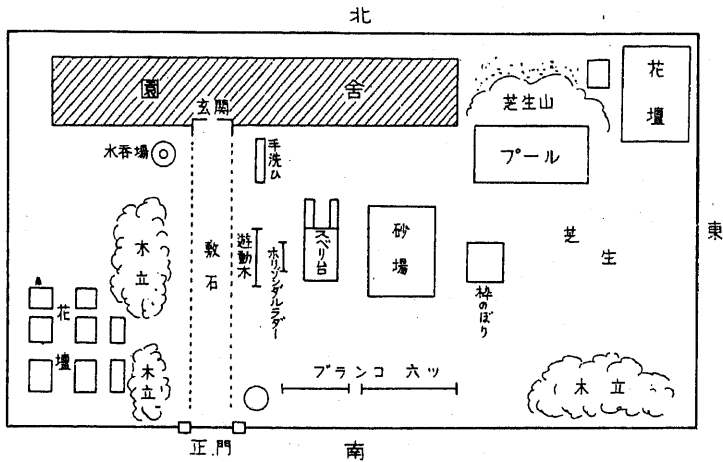
總敷地約一千二百坪、園舎敷地を除いて遊園として實際に利用してゐる處は八百坪前後と思ふ。南正面に正門があり、園児昇降玄關まで大體直線に敷石を敷く。然して、玄關から見てもその敷石の右側が木立並花壇、左側が運動具が集置され、芝生に續き、園児は登園の場合は、園庭を突切るので庭全體が見られるやうになつてゐる。水呑場及手洗場は玄關の兩側に設備されてゐる。下圖は園庭と運動具の概要である。

一、園児の昇降により見たもの

此の調査は午前八時頃より、元氣よく正門より駆け込んで來る園児達が、先づお辨當道具をお部屋に片付けて來てから、必ずお庭へ遊びに出てゆくことにしてゐるが、その遊具を目當てに行くか、何を目的にするかを確めてみた。

男兒は大體砂場へ、女兒は先づブランコへ向つた方向へ行くことが解る。女兒のブランコを好むことは、ブランコ

のリズム運動が適してゐること、男兒は砂場の構成的な遊



一時九時十		一時八時九		間 時	
女	男	女	男	別 性	場 砂
5	9	4	13		場 砂
0	2	5	3		臺 滑
6	1	12	2		コンラプ
0	0	0	1		木動遊
1	3	4	13		生 芝
0	0	6	5		他 其
12	15	31	37		計
95					

調査園児百名

びを好んでゐる結果であらう。

そして、男女共その半数は遊具目指して駆けて行くが、特に早く登園する子供は遊具の獨専する競争者もゐないのに駆け出して行くやうだ。而して九時近くなるに従ひ、きの遊具にも全部大小様々のグループが出来て、遊具をそのグループで占められてゆくのであるが、この時刻から以後に來たる子供は、遊具の選擇に躊躇する傾向があつて、玄關を出てから駆け出さず、又眞直ぐには歩かない。即ち、目的がはつきりせず、色々な曲線を描いて歩いてゆき漸くそこかへ落着くものが多い。殊に何ら當てもなく芝生の方へ行き、一巡して戻つて來るものが多くなる。これを見て登園の時間は注意すべき點と思ふ。

一、水呑み場並手洗場から見たもの

一時十時一十		一時九時十		一時八時九		間 時	
女	男	女	男	女	男	別 性	場 香水
20	13	24	39	6	3		場 香水
8	8	22	11	6	0		場 洗手
17	8	11	13	3	3		へ關玄 る 戻

には砂場から來て手を洗ひ、再び砂場へ歸つて行くものもあるが、大體は手洗場へは砂場遊びを中止して、別な遊具へ移る子供が大部分である。水呑み場へは、何れの遊具からも集散するやうだ、従つて、手洗場は砂場の側に、水呑み場は各遊具の中心に配置すべきか考へられる。それから、九時—十時に至れば、男女共に玄關に戻るものが多くなるが、全體に動作は緩慢で疲勞が見られる。朝より、外庭での自由遊びを繼續させた場合は、この時刻頃より、氣分を一轉させて靜かな遊びに誘導すべきであらう。

一、遊具の利用者數と遊具間の動き

調査の時の詳細な個人々々の歩行線を描いた圖解があるが、非常な枚數になるので略す。

初夏云へ、八時から九時の間は此水呑み場も閑散であるが、九時乃至十時に至れば斷然繁昌を呈し、活動量の多いだけ男兒の方が女兒よりはるかに多く集まる。次に手洗場へは、反對に清潔感の強い爲か、女兒の方が男兒より多く集まる。なか

○砂場

性別	八時—九時	九時—十時	十時—十一時	計
男	五四	三四	三一	一一九
女	五三	四一	三三	一二七

調査園児百名

右表で見られる如く、九時までの間に全園児數と同數の者が砂場に遊んでゐる。従つて男子は砂場から他に移り、女兒はブランコを経て砂場に至るものと見るべきである。

○ブランコ

性別	八時—九時	九時—十時	十時—十一時	計
男	一七	二五	四五	八七
女	三一	四九	五二	一三二

男児に比し女兒斷然多數なり。

○滑り臺

性別	八時—九時	九時—十時	十時—十一時	計
男	一九	一七	五一	八七
女	二	〇	二一	二三

この日、ロープを持つて滑臺に登り様々に利用す。女兒

加はる者少し。

○遊動木

性別	八時—九時	九時—十時	十時—十一時	計
男	一一	一五	一六	四三
女	二	一一	二二	二五

力を要する爲男児多し、砂場より移つて來る者大部分である。

○此他枠のぼり、太鼓橋、トンネル等々の遊具は比較的に利用者少數なれば略す。

砂場、ブランコは利用者最も多く、滑り臺、遊動木、其の他の順位になる。この日の滑り臺の利用者は、綱引き用のロープを利用して遊んだ爲めに、割合に多數にのぼつた傾向があつたが、平常は比較的少數の利用者に留るものと思ふが、他の道具を併用する事に依つて、利用者の増減はかなりはげしいといふことも考へられる。利用者數其利用の順序から見ると、園児昇降により正面等分の距離にブランコ、砂場を配置し、左に廻りに滑り臺、遊動木を配列することが良いと思ふ。調査圖の歩行線の流れが、芝生方面を巡つて來る子供の歩行線は全體に、右から左へ廻つて歸つて來るものが多いのを見て左へ向つて配列し度いと思

(一九頁へ)

ある一男児の保育日記をめぐりて

附屬幼稚園

園児の母

杉山米子
久米京子

保育日記の一節

修了式の濟んだ翌日、外にはうららかな日がさして、見渡す向ふの原には陽炎さへもへて居る。所在なきに居て何か氣落ちのした心に、昨日見送つた許りの、可愛いく三人の子供達のあの顔、この顔が往來する。未熟な身にも大過なく、入園當時のまゝの三十人を無事に小學校へ送る事の出来る幸を、何より喜ばなければならぬに……何故か淋しい。小さい頃お友達をおよびして一日楽しく遊んだ後、急に潮の引く様に一度にお友達の歸られた後に、私は今と同じ氣持を味つた事を思ひ出す。今遊んだ許りのトランプが一枚、二枚散つて居る、お友達の坐られた時の儘並べられた坐布團がめい／＼放射線狀の坐り跡を残して……見廻して急にうすら寒さを覺えたものだつた。

× × × ×

私は卒業した子供達の個人日誌の頁を繰つた。毎日一人一行づゝ記した極く簡單なものだが、そこにはあの可愛い子供達の面影が活き／＼と躍つて居る。日々の事に追はれて、唯記録した儘で一人々々の縦の系統を落著いて見る事もなく過したが、今私は靜にそれを見乍ら思出を手繰らうとして居る。

× × × × ×
Kさん、本當に幸せなお子さんであるKさん、すく／＼と伸びた若芽、近付くものは誰一人と愛さずには居られない様なお子さんだ。其のKさんの思ひ出、餘りにく／＼多いKさんの思出の中から……

× × × × ×
四月×日 今日は何となく元氣がない、しかし動作は別にだるさうでもないが。

四月×日 皆で鬼ゴッコをして居て誘つたが、さうして
もお部屋から出なかつた。

四月×日 午前中外へ出なかつた。午後やつミテレスの
所まで出た。

普段元氣なKさんにしては珍しく、一三日元氣がない
く云ふ日誌が續いた。年長組として登園し始めてから
すぐの事だつた。いつにない事で、何か病氣の前兆でも
ないかとお辨當の時氣を付けて見ても食慾には別に變りは
ないらしい。お仕事も自分からキチンくして動作もだ
るさうな様子はない。それなのに何となく元氣がない。氣
がかりなまゝに或朝お母様に伺ふと、此の数日お家へ歸る
と晝寢をしますとの事、矢張り何か疲れて居るのだと思
ふ。でも未だ幼稚園が初つてからほんの数日、疲れる程の
原因も思ひ當らないので、日誌を遡つて見た所が、不思議
な事に、ついお正月休みが終つて間もない頃にも今と同じ
様な形に元氣のない事を案じた日誌が数日つゞいて居た。
ふと思ひ當つて前年の夏休み直後の日誌を見た。あゝやつ
ぱり……學期始めに、きまつて同じ形に元氣のなくなるK
さん、私はつひ此開始めの日に、「海の組になつて皆さんは
幼稚園のお兄様やお姉様におなりになつたのよ、好いお兄
様、お姉様におなりになつて、川や森や林の組の小さい方
達に恥かしくない様にしませうね」と云つた時の、眞面目な

餘りにも輝いて居たKさんの瞳の色を思ひ出した。そして
私は湧上つて来る微笑を感じ乍ら、一方では何となく涙の
浮かぶ心だつた。眞面目なKさんは、いつもお休みが終つ
て幼稚園が始まるまで、きつと改つた氣持で、そこはかきな
い自覺を持つのだ。そして今度も、大きな組になつての自
覺を、覺悟を、あまり大きなものに考へ過ぎて仕舞つたの
だ、自分で動きのこれない程、よいお兄様、小さい組のよ
いお兄様にならうと固く覺悟してしまつたのだ。可哀
さうに……

其の翌日は本當にのびやかな春らしい日であつた。朝から
ござ、やかん等の用意をして子供達にはお辨當のバスケッ
トを持たせて、本校の廣いグラウンドへ出掛けた、巻いた
ござをM夫さん、Kさん、N夫さんに領ける。「爆彈三勇
士だ、」と大喜び、Kさんも今日は流石に元氣だ。フィ
ールドの芝が青々芽吹いて、ところ／＼濃緑の群に白く
點々見えるのは早咲きのクローバーか、グラウンドの上
の八重櫻がホッテリゆれて居る、子供達は歡聲をあげて
かけ出した。バスケットもござも投げ出して……

其の一日の面白かつた事、私も入れて二十何人、土手中
探がして可愛い「つくし」を三本だけ見付けたのも此の日、
ポトリミ花の形のまゝ落ちた八重櫻は勳章に、思ひ切り廣
々とした所で鬼ゴッコもした。靴の裏が芝でツルツルにな

る迄。皆わけもなく大きな聲で笑つたり叫んだりして居た。本當に楽しかつた一日、だが此の日の何よりの收獲は殻を抜けたKさんが。又すつかり以前の潑刺さを取戻した事だつた。

母親の感想

『新らしい環境に對して非常な抵抗を感じる』云ふ事は、あの子が幼少の頃からの一つの目立つた特徴でした。満二歳に近い頃にこんな例があります。その秋逗子の親戚を訪ねた折に、あの子は始めて海を見たのです。お家の砂場の何倍あるかわからない廣い廣い砂場を喜々として走つて行つた彼が、渚に近い砂丘を駆け登つた折に、思ひがけなく、今しも沈まうとしてゐる眞赤な夕陽をのせたあの子くましい波の姿を、身近に見出した時の事です。あの子は自然の偉大さ、神秘さの前に、完全に眩惑された様に、固く父親の手を握りしめて、面に異様の感動を浮べたまふ、ぢつと海を見つめた儘立ちすくんで居るのです。そして促されても一步も前進する事を肯じないでゐるのです。一年置いて満四歳の夏、二週間餘りを海岸に過した事があり、此の時も二つ年下の妹が何の怖れもなく喜々として波に戯れるのに反して、あの子は、父親がみんなに心を碎いて誘はうとして、さうしても海になじむ事が出来なかつたのです。引上げなければならぬ頃になつて、や

つと海の面白味が判りかけて來た様でした。そして海に心から親しんだのは、その翌年の夏からでした。新らしい環境になじむのに、こんなに暇ざるあの子が、幼稚園のお世話になる様になつた時は、家の者達が何よりも此の點を氣遣ひました。あの頃の日記を繰つて見るに、家の者が打揃ふさいふ理由で大好きだつた日曜が、今度は反對に大嫌ひになる程、幼稚園を好んで居ました。それなのに團體さいふものに全く始めて加はつたあの子の疲れ方は非常なものでした。歸宅後理由もなくむづかる事が多く、初めの日は二三時間程手もつけられない程むづかり翌日は之が三十分程續き、第五日になつて始めて平常に復した程でした。此の間中には珍らしく夕方四時か五時にはもう床について、夕食も攝らずに、朝まで一眠りに眠つて了ふのでした。こんな風であの當座は食欲も振はず、體重もずつと減つて居ます。新學期が始まる毎に、程度の差こそあれ、何時も似通つた事が起つたのです。そして何時も先生の御心配の種になつたわけです。

家中の者が何時もあの子の神經を過度に刺戟したり、疲れさせたりする事を恐れて、日常の生活が凡て子供本位に運ばれて居た爲に、新らしい環境は、何時もあの子を餘分に疲れさす事が多かつた様です。少しづつは訓練を續けて行つた方がよかつたかしらん、何時も考へなほして居りま

す。

保育日記の一節

六月×日 今日も一日中お砂場、今日はさうく終日お

仕事に入つて來なかつた。

「Kちゃん、Sちゃんがお部屋でタンポボ寫生してるよ、僕もしやうかなあー。」

「……………」答へはない。

「ねえKさんも寫生しない？」

「いや。」

寫生を誘つて居るのは氣の弱いHさん、みんなにし度い事があつても、一人では敢てする事をしないお子さん、Kさんは其の誘ひをにべもなく斷つて、ひたすら積木電車を片手に四這ひになつてお砂場中を走らせて居る。行く所トネルや鐵橋を作る。勢よく電車を走らせるこそそれが崩れる、又作る。今朝からすつこ續いたお遊び、いや、今朝からさころか、今日でもう一週間許りも此の遊びがつゞいて居るのだ。間で日曜がはさまつて忘れるかと思つたのに、月曜には又忘れずに、お早やうさ云ふが早いか積木電車で四這ひなのだ。

「海の組おーべんきーく」

歌の様に節をつけてよび合ひ乍ら、逸早く皆がお部屋へ

入つて來る。急に人影のなくなつたお庭にたつた一人お砂場のKさん。

「Kちゃん、お辨當よ。」

F子さんがお姉様の様に優しく聲をかけた。

「いやだァー、僕之して居るんだものォー。」

F子さんが呆れた様な困つた様な顔で、私の救ひを求め様に振返つた。私は未だ背中を向けて居るKさんの後姿を眺めながら、若し他のお子さんがお食事を待つて居るのでなかつたら、もう聲もかけずにそいつとして置き度かつたのだ。こんなに打込んで居るものを、こんなに自分で自分の生活を築いて居るものを……。

母親の感想

『自分自身の興味から生活を築く』こいふ事は妹と對照して、家庭でも非常に目立つ事柄です。あの子の描畫能力が、所謂錯畫時代を経過した頃、あらゆる興味が自動車に集中して、來る日も來る日も街に出て、幾時間も立ちつくしては、次から次から來る自動車に眺め入つた事がありました。併し憧れのスマートな流線型の自動車を、スラ／＼と畫に表現出来ないもごかしさを、何時もあの子は感じて居たのです。こころがさうく一案を案出しました。おびたゞしい數の銅貨を集めて、これを疊の上に並べるこいふ

(四一頁より)

ハイデ

イ
(第十三回)

津田芳雄 譯

そこでゼーゼマン氏はお醫者様に、家の者のこ
らすが見たまいふ、夜なく玄關の戸が何者かに
開けられる話をした。そしてその爲めの用意に、
ピストルを二艇持つてゐた。もし召使ひの友達か
なんかが、主人の留守中を見込んでいたづらでも
してゐるのならば、一發の空發で縮み上つて退散
してしまふだらうし、ほんものの泥棒が盗みに這
入る時の下準備に、幽靈さわぎで家の者を夜中の
物音に馴れつこにさせておかうと企らんでゐるの
ならばなほさらのこま、よい武器を備へておくに
越したことはないさ、ゼーゼマン氏は考へたから
である。

二人はいつかセバスタチャンとヨハンが寢ずの番
をした部屋に陣取つた。テーブルの上には葡萄酒
が一瓶備へてあつた。いよいよ夜明しをしなけれ

ばならないやうなこまにでもなれば、時々元氣つ
けるものが欲しくもならうかと思つたからであ
る。その傍にはピストルが二艇さ、あか／＼と灯
りのついた大ラムプが二臺。ゼーゼマン氏はうす
暗い灯りの中で幽靈を待つたぞ、思つてもいやだ
つた。

外の廊下に明りが漏れて幽靈が怖がつて近寄ら
ないやうなこまがあつてはさ、戸はびつたりと閉
めておいた。二人の紳士は氣持よささうに安樂椅
子に寄り、時々葡萄酒をかたむけながら、四方山
の話をしてゐるうちに、知らぬ間に十二時が打つ
た。

「さうやら幽靈氏は人間のほひを嗅ぎつけて、
今夜は散歩はお取り止めさ見えますな」
お醫者様が云つた。

「まあお待ちなさい。草木も眠る丑滿時」つて云ふぢやありませんか」

二人は又話をはじめた。やがて一時か鳴つた。家ちうも、街も、しんじ静まり返つた。突然、お醫者が手を舉げた。

「しッ！何か音がしやしませんでしたか」

二人さも、耳を澄ました。するさ、門をそつこはづして鍵をまわし、戸を開ける音が、はつきり聞えた。ゼーゼマン氏は思はずピストルに手をのばした。

「大丈夫なんでせうな」

お醫者様は立ち上つて云つた。

「大事はこつた方がいいです」

ゼーゼマン氏は小聲で云つて、もう一つの手にラムプをこつた。お醫者様もピストルミラムプに身をかため、靜かに先きに立つた。

二人は廊下に出た。月光が開け放された玄關の戸から美しく射し込んで、身動きもしないで戸口に佇んでゐる白い影を照らしてゐた。

「誰だ、そこにいるのは！」

お醫者様はごなり付けた。その聲は二人がラムプミピストルをかざして進んで行く廊下に、すみ

すみまで物凄くひびきわたつた。

その影はふり向いて、低い叫び聲をあげた。小さな白いねまき姿の、それはハイディではないか！はだしのまま、氣狂ひの様な眼でおびえたやうにピストルミラムプを見つめたまま、風の中の木の葉のやうにからだぢうがたがた震へながら立つてゐるのだつた。二人の紳士たちは、呆氣にこられて互ひに顔を見合せた。

「おや、これはいづぞや水を汲みに行つてゐた子供ぢやありませんか、ゼーゼマンさん」

お醫者様が云つた。

「一體これはさうしたこゝさんだね、お前。なにが欲しいのだ。なにしにこんなところへ降りて来たのだ」

ゼーゼマン氏もたづねた。怖ろしさに眞蒼になり、聲もきれん／＼にハイディは答へた。

「わたし、わかりませんわ」

「まあ、これはわたしに委せておきなさい、ゼーゼマンさん」

お醫者様は進み出た。

「あなたは部屋に引き取つて下さい。わたしはこの子を寢かせて來ます」

そしてピストルを下において、お医者様はやさしく子供の手を引いて二階へつれて行つてやつた。

「怖がるんぢやありませんよ。ちつとも怖くはないんだからね。よしよし、さあそつち行きませう」

竝んで階段を上りながらも、お医者様はかう云つて子供を元氣づけてやつた。

ハイデイの部屋に著くミ、お医者様はテーブルの上にラムプをおいて、ハイデイを抱き上げてベッドに寝かせ、よく氣を付けてお蒲團にくるんでやつた。そして傍に腰をかけて、ハイデイの氣の鎮まるのを待つた。やつちハイデイの震へが止まるミ、手をさりながらやさしく慰めるやうな聲で云つた。

「氣分がよくなつたでせう。さつきは何處へ行くつもりだつたの？」

「さういへも行くつもりぢやなかつたの。階下へ降りてるなんて、わたし知らなかつたのです。いきなりあそこに立つたのですわ」

ハイデイは云つた。

「さう、それぢや夢を見たのですね。なにかにて

もはつきり見えたり聞えたりする」

「ええ、わたし毎晩夢を見ますわ。そしていつでもおんなじ夢ばかり。わたしがおぢいさんさへ歸つてゐて、外では樅の木が枝を鳴らす音がして、お星様がキラ／＼光つて、わたし、うれしくなつて戸を開けて跳び出すミ、それはそれはさつてもきれいなんですの！でも、目が覺めるミ、やつぱりフランクフルトにゐるのですわ」

ハイデイはこみ上げて來る涙を、一生懸命こらへてゐた。

「さうも痛いところはありますか。頭ミかせなにかミか」

「いゝえ、でも何だかこゝんミに、重たい石がのつかつてゐるみたいなきがしますの」

「何かのみ込んでつゝかゝつてゐるみたいなの？」

「いいえ、そんなんぢやないんです。なんだか重たくて、思ひつきり泣いて見たいやうな――」

「さう、それで、思ひつきり泣いて見ましたか」

「いゝえ、わたし、泣いぢやいけないんです。ロツテンマイアさんに叱られますから」

「それで、いつもぐつちのみ込むのですね。フランクフルトはすき？」

「ええ」

ハイディは聞えないくらい小さな聲で答へた。でもそれはまるで「いゝえ」を云つてゐるやうだつた。

「おぢいさんご何處に暮らしてゐました？」

「お山の上で」

「ぢやつまらないんですね。時々退屈したでせう？」

「まあ、退屈なんかするものですか。それはそれはきれいなんですもの！」

ハイディはもう何も云へなくなつた。山の思ひ出や、今夜のびつくりしたこゝや、長い間泣きたくても泣けなかつた悲しさなごが、一度にこんぐらがつて押し寄せて來て、子供の小さな胸ひごつに支へ切れずに、瀧のやうな涙になつてあふれ出た。ハイディは大聲でしゃくり上げはじめた。

お醫者様は立ち上つて、そつこハイディの頭を枕の上のせてやり、

「よしよし、泣きたいだけお泣きなさい。それが一番の藥です。あしたの朝は、ちやんごよくなつてゐますよ」

を云つて部屋を出て、ゼーゼマン氏の部屋へ降

りて行つた。向ひ合つて安樂椅子にかけながら云つた。

「ゼーゼマンさん、あの子は夢遊病にかゝつてゐますよ。あの子こそ、夜な／＼玄關の戸を開けて家ぢうを震へ上らせてゐた幽霊の正體です。それに、あの子はひざいホームシックにかゝつてゐて、まるで骸骨みたいに瘦せこけてゐます。ほうつておけば、ほんものの骸骨になつてしまひますよ。早速何とかしなければなりません。そこで、夢遊病にもホームシックにも、療法は一つです。明日にも山へ送り歸すことです」

ゼーゼマン氏は立ち上つて、非常に心配さうに、そは／＼ご部屋中を歩きまはつた。

「やれ／＼、あの子が夢遊病で、ホームシックにかゝつてゐるのですか。みんなこのうちで起り、うちで弱らせてしまつたごごなのに、今まで誰ひごりそれに氣を付けてやる者もゐないごは！ あんなに丈夫で元氣でやつて來た子を、骸骨のやうに瘦せさせて、おぢいさんのごころへ送りかへせご仰しやるのですか。わたしにはそんなごごは出來ません。先生、さうにかしてあの子を、もご通り元氣にしてやつて下さい。かへすのはその上の

「ご心配です。何かしてやつて下さい」

「ゼーゼマンさん、よく考へてなさらないといけません」

お医者様は云つた。

「あの子の病氣は薬でなほる性質のものではありません。もしもごあんまり丈夫なたちでもありませんが、山へ歸せば山の空氣で立ち所によくなります。もし今歸さなければ——さうです、あの子には、たゞへ病氣のまゝでも、永久に歸れなくなるよりは、まじぢやありませんか」

ゼーゼマン氏ははつきり立ち止まつた。この一言は、ひびくこたへた。

「あなたがさう仰しやるなら、それより外はないでせう。早速手筈を整へませう」

そして、なほも色々相談してから、お医者様は歸つて行つた。夜はすつかり明けはなれ、お医者様を送つて主人みづから戸を開けた時は、朝の光りが家ぢうに射し込んでゐた。

十三、お山の夏のゆふぐれ

ゼーゼマン氏は興奮していら／＼しながら、大急ぎでロツテンマイアさんの部屋に行き、はげしく戸を叩きながら、呼んだ。

「大急ぎで降りて来て下さい、わたしは食堂にいますから。すぐに旅行の支度をしなければならぬのです」

ロツテンマイアさんは、びつくりして飛び起きた。時計を見るに、まだ四時半だつた。こんなに早く起きのは始めてである。一體何事が起つたのかしら。早く知りたいのさ氣が立つてゐるのさで、ロツテンマイアさんはすつかり上がつてしまひ、あわてればあわてる程まごついて、もうちやんこ着てしまつてゐる着物や帶を、血眼になつて探しまはつたりした。

その間に、ゼーゼマン氏はそれ／＼の召使部屋に通じるベルを鳴らして、順々にみんなを起した。するに召使ひ達は、これはてつきり幽霊に襲はれた御主人が助けを求めてゐるのだと思つて、恐ろしく食堂へ顔を出して見るに、御主人は一向幽霊なきに出會したあさかたもなく、元氣一ぱいで歩きまはつてゐるので、二度びつくりだつた。ヨハンはすぐに馬車の用意をするやう、ティネットはハイデイを起して旅行の身支度をさせるやう、セバスタンにはデーテの奉公先きのお屋敷へデーテを呼びに行くやうに、それ／＼と吩咐けられた。

そこへロツテンマイアさんが、やつこ身じまひを
終へて澄まして降りて来た。見れば帽子を後向き
にかぶつてゐる。ゼーゼマン氏は、少し早く起し
たのでこれはまた大へんな御狼狽だなをかしく
なりながら、早速仕事を呟附けた。すぐに旅行か
ばんを出して、あのスキスの子供——ゼーゼマン
氏はハイディの名前をうろ覚えのまゝ、いつもか
う呼んでゐた——の持ち物を詰めること、それか
ら家へも相當のものを一通りは持つて歸れるや
う、クララの着物も澤山入れてやること、すべて
考慮の餘地はないのであるから、さつさ取り行
ふこと、さいふのであつた。

ロツテンマイアさんは、ぼかんにゼーゼマン氏
の顔を見つめながら、まるでそこに根が生えたや
うに突つ立つてゐた、まるつきり、あてがはづれ
たのである。ロツテンマイアさんのつもりでは、
御主人が昨夜のおそろしい幽霊の話を、長々話
して聞かせてくれるものと思ひ、白晝そんな話は
面白からうと楽しんでゐたのである。ところが、
この面白くもない面倒な仕事である。ロツテンマ
イアさんはがっかりして、でもまだ詳しい説明で
もあるのかと、しばらくはまだ立ちつくしてゐた。

しかしゼーゼマン氏には、この家政婦に委細を話
して聞かす氣も暇もなく、そこにのこしたまゝ、
さつさクララの部屋へ行つてしまつた。クララ
は家ぢうのこのさわきに目を覺まし、何事が起つ
たのかと、不思議さうに耳をすましてゐた。そこ
でお父様はそばに坐つて昨夜の一部始終を話して
聞かせ、お醫者様の話では、ハイディの夢遊病は
ずる分ひぎくなつてゐて、このまゝ、驚じて來れば
だんく遠くまで出かけるやうになり、しまひに
は屋根の上までのぼるやうになつて、危くてたま
らないから、早速かへすことにきめたのだから、
クララもそこをよく聞き分けてくれなければいけ
ないこと云つた。クララは大層悲しがつて、さうに
かしてハイディを引き留める方法をあれこれ考
へ出したが、お父様は取り合つて下さらなかつた。
その代り、おさなしくいふことを聞けば、來年の
夏にはスキスへつれて行つてあげようこと約束して
下さつた。それでクララも、このさうにもならな
い事實には争ひがたく、やつこ承知して、それで
はせめてハイディのすきなものをに入れてあげたい
から、荷造りはごゝでさせていたたくやうにお願
ひした。お父様は勿論悅んでお許しになつた。

こんな時間にわざわざお迎へは、一體何事だらうさいばかりながら、デーテがやつて来て廊下待つてゐた。ゼーゼマン氏はハイデイの様子を話し、今日すぐ山へ連れて歸つてやつてもらひたいさたのんだ。デーテは全く思ひもかけぬこゝで、すつかり失望した。二度と再び足踏みするなと云つたアルムを皆さんの最後の言葉もまだ生ましくしい今、勝手な時に子供をあつたり引き戻したりしたあこであるから、又自分が連れて行けば、そんなに怒鳴られるかもわからないと思ふのだつた。そこで例の雄辯で、旅行があまり突然のこゝなのでけふあすさいふわけには行かないし、それにすつこ仕事がつかへてゐて、この先き當分は手が抜けさうにもないを斷つた。ゼーゼマン氏はデーテが行きたくないのを見て取つたのでデーテは歸し、セバスチャンを呼んで、子供を送つて行くことを命じた。今日のうちにパーゼルまで行き、翌る日家まで送りささげ、すぐ引き返して来るやうに、おぢいさんには詳しく事情を書いた手紙をこまつけるからと云つた。

「だが、これだけは特に氣を付けておくれ」

ゼーゼマン氏は云つた。

「パーゼルには行きつけのホテルがあるから、この名刺を持つて行つて、部屋がきまつたら、何よりもまづ、子供の部屋の窓を調べて鍵をかけ、子供が寢てしまつたら、ドアにも鍵をかけるんだよ。あの子は夢遊病にかゝつてゐるから、知らないホテルなごで、うろくこ夜中に玄關の戸を開けに行つたりされたら、危くてしようがないからな。わかつたかね」

「やあ、左様でございませうか！」

セバスチャンはやつこあの幽霊の正體がわかつて、叫んだ。

「さうなんだよ。お前もヨハンも臆病者だな。家ぢうお馬鹿さんが揃つてゐるよ」

「そしておぢいさんにこまつける手紙を書きに、自分の部屋へ立つて行つた。

セバスチャンは馬鹿くしくして、ひそりで口惜しがつた。

「あのヨハンの阿呆が無理矢理に俺を引き戻さへしなれば、あの白いかけについて行つて白體を見届けてやつたんだのに。今出て来て見ろ、ついで行つて見せるぞ！」

だが今ごろいくら威張つても、こんなに明るく

部屋のすみぐまで日の射し込んでゐる晝ひながら、誰だつてついて行つて見せるだらう。

ハイディは今朝、いきなりティネツテにゆり起され、何が何だかわからないまゝに、よそゆきの着物を着せられ、今度はきんなこぎが起るのか、わく／＼しながら待つてゐた。こんな山出しの小娘なんぞ馬鹿にして、ティネツテはなんにも説明してくれないのである。

ゼーゼマン氏は手紙を書き終へて、食堂にもぎつて来た。朝御飯の用意が出来てゐた。

「子供はここにいるかね」

ゼーゼマン氏はたづねた。

ハイディが這入つて来て、

「お早うございます」

こ云ふと、ゼーゼマン氏はちつこ顔を見て、

「さうだね、うれしいかね」

こたづねた。ハイディは何のこもだかわからないやうな顔をして、ちつこ見上げてゐた。

「なんだ、まだなんにも知らないんだね」

ゼーゼマン氏は笑ひ出した。

「今日、いますぐ、おうちへ歸るんだよ」

「おうちへ？」

ハイディは低い聲でうなるやうに云つて、眞蒼になつた。感きはまつて、しばらくは息もつけなかつた。

「そのこをもつこ詳しく話してあげようか」

「話して頂戴。もつこ、もつこ」

ハイディははじめて頬を眞赤にして、うれしさうに叫んだ。

「よし／＼」

ゼーゼマン氏は腰をおろし、ハイディにもかけるやうに合圖しながら、

「先づ御飯をぎつさりお上り。それから馬車に乗つて歸るんだよ」

けれどハイディはもう、御飯なご一口ものごを通らなかつた。心もそぞろに、いまだに夢だかほんたうだかわからず、もしかしたら又目がさめて、自分はねまきのまゝでお玄關に立つてゐるのではないかしら、なご／＼思ふのだつた。

「セバスチャンに、辨當をぎつさり持たせてやつて下さい。そしてこの子は今食べられさうもない、無理もないこもだが」

ゼーゼマン氏は、丁度這入つて来たロツテンマリアさんに云ひ、今度はハイディに、

「さあ、馬車の支度の出来るまで、クララを遊んでおいで」

ミヤサしく云つた。

ハイデイは待つてましたさばかり、お二階へ駆け上つた。部屋のみん中には、大きな旅行かばんが開いたまゝで置いてあつた。

「ハイデイ、いらつしやいな」

クララがハイデイを見付けて叫んだ。

「あたしの入れてあげたもの見て頂戴——氣に入つて？」

クララは着物や前掛やハンカチや、勉強道具などを出して見せ、

「それから、これ、ごらん下さい」

ミ、我慢さうに一つの籠を高くかざした。

ハイデイはのぞいて見て、飛び上つて喜んだ。

その中には、十二本もの眞白なきれいな巻パンが、おばあさんのお土産に這入つてゐた。子供達はうれしさうに時の経つのも忘れ、そのうち

「馬車が参りました」

ミ呼びに来たので、お別れを悲しんでゐる暇な

ミ、ちつともなかつた。
ハイデイは大切な御本をきりに、自分の部屋へ

駆け行つて。これはハイデイが夜も晝も肌身離さず持つてゐて、寝る時は枕の下に入れておいたので、ハイデイの思つた通り、誰も荷造りする時に入れるのを氣がつかなかつたのである。ハイデイはパンの籠の中にこれをしまつた。それから、これもきつミ忘れられてゐるだらうミ、たんすを開けて、もう一つの大切なもの——赤い肩掛——を探し出した。そのほかにもう一つ何かを見付け出すミ、大事さうにそれを肩掛でくるみ、籠の一等上へのせた。赤いその籠の包みは、ひさく高ばんで目立つた。それから新しいきれいな帽子をかぶつて部屋を出るミ、玄關ではもうゼーゼマン氏が馬車に乗せてやらうミ待つてゐてくれたので、クララを惜しむひまもなかつた。

日本幼稚園協會編輯 幼兒の教育

會長 東京女子高等師範學校長
 主幹 東京女子高等師範學校教授
 附屬幼稚園主事
 下村壽一
 倉橋惣三

日本幼稚園協會規則

- 第一條 本會ハ幼兒教育ノ改良發達ヲ圖ルヲ以テ目的トス
- 第二條 本會ハ日本幼稚園協會ト稱ス
- 第三條 會員タラントスルモノハ幼稚園ニ關係アルモノ又ハ幼兒教育ニ篤志ナルモノトス
- 第四條 會員ハ會費トシテ一ヶ月金參拾五錢ヲ躰出スヘシ、會員ハ無料ニテ本會發行雜誌ノ配布ヲ受ケ又本會ノ事業ニ關シ諸種ノ便宜ヲ受ケ
- 第五條 令聞名望アル人ニシテ本會ノ事業ニ裨益アリト認ムルトキハ特ニ請ビテ客員トナスコトアルヘシ
- 第六條 幼稚園ニ關係アルモノニシテ本會ノ事業ノ爲ニ特ニ盡力ヲ與ヘラル、モノニ請ヒテ地方委員トナスコトアルヘシ
- 第七條 本會ハ毎年一回總會ヲ開ク。但場合ニヨリ臨時休會スルコトヲ得
- 第八條 本會ハ左ノ事業ヲ行フ
 - 一、幼兒教育ニ關スル研究及ヒ調査
 - 一、幼兒教育ニ關スル講演會及ヒ講習

- 會ノ開催
 - 一、雜誌發行(毎月一回)
 - 一、幼兒教育ニ關スル圖書刊行
 - 一、保姆就職及招聘ニ關スル仲介
 - 一、其他本會ノ目的ニ裨益アリト認メタル事件
- 第九條 本會ニ左ノ役員ヲ置ク
 - 會長 一名 會務ヲ總理ス
 - 主幹 一名 會長ヲ補佐シテ會務ヲ掌理ス
 - 幹事 若干名 會長ノ指揮ヲ受ケ會務ヲ分掌ス
 - 評議員 若干名 重要ナル事件ニ關シ會長ノ諮詢ニ應ス
- 第十條 會長ハ客員中ヨリ推薦スルモノトス
- 第十一條 主幹 幹事 評議員ハ二ケ年ヲ期シテ會長ヨリ推舉スルモノトス
- 第十二條 本會ハ必要ニ應シ特ニ委員ヲ設ケ又ハ書記ヲ雇入ル、コトアルヘシ
- 第十三條 本規則ハ總會出席會員ノ三分ノ二以上ノ同意ヲ得ルニアラサレハ變更スルコトヲ得ス

定價

一ヶ月分	金參拾五錢
半年分	金貳拾圓拾錢
一年分	金四圓貳拾錢
拾貳冊送	共
拾貳冊送	共

特等面一頁二等面一頁
 金貳拾圓金拾圓
 一等面一頁一頁以下
 金拾五圓(御斷り)
 神田區駿河臺ノ三品田
 廣告社に御申込下さい

(外國行郵税は一部金拾貳錢の割にて拂掛込下さい)
 昭和十四年四月十三日印刷納本
 昭和十四年四月十五日發行
 幼兒の教育 第三十九卷 第四號

不許複製 禁止轉載

編輯者 倉橋惣三
 發行所 東京市本郷區駒込林町百七十二番地
 印刷者 柴山則常
 印刷所 東京市本郷區駒込林町百七十二番地
 倉橋 杏林 舍

發行所 日本幼稚園協會

東京市小石川區大塚町三十五
 東京女子高等師範學校附屬幼稚園內
 振替口座東京一七二六六番

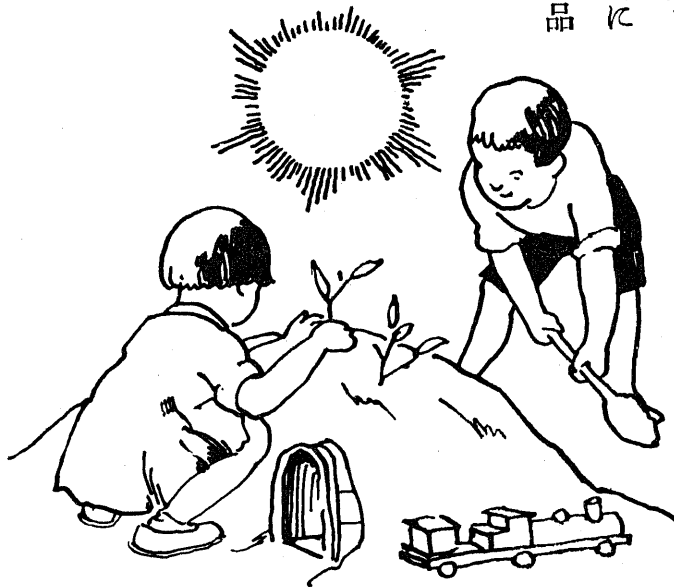
注文規定

- 一、本誌御注文の方は凡て前金(郵税共)で願ひます。(郵券代用の場合には總て一割増)
- 一、御送金の場合はなるべく振替貯金で振替口座東京一七二六六番日本幼稚園協會宛に願ひます。
- 一、送金の節には第何巻第何月號より第何月號迄と明記せられたし。
- 一、本誌の代金は別に領收證を差出しません。特に御入用の方は往復はがきで御申越を願ひます。
- 一、會費切又は前金切の際にはその最終發送の雜誌の帯封に「前金切」の印章を押捺いたします。其節は早速御送金を願ひます。
- 一、本誌の見本御入用の場合には前金參拾五錢發送を願ひます。

新學期の御準備

明朗に健全に、土に親しむ適度の運動と建設の心持とに、多數のお子達を同時に遊び歡ばせるものは……砂場遊び用品

- ◇木 鋤 (十本) 金 四 圓
- ◇新案 杓子 (十個) 金一圓五十錢
- ◇一合 樹 (十個) 金二 圓
- ◇板 箕 (十個) 金二 圓
- ◇秤 (十個) 金二圓五十錢
- ◇汽車ミトンネル (二組) 金一圓八十錢
- ◇砂 型 (四組) 金 五 十 錢
- ◇砂場の背景 (二組) 金二圓五十錢
- ◇砂場交通用具 (十五個) 金三圓五十錢
- ◇砂場用積木 (百廿個) 金 三 十 圓



食館レベレフ 社會式株

番二六六三(33)話電・二町保神・田神・京東 社 本
 番七二八三(33)話電・五町後備・區東・阪大 店 支
 番八三九一(24)話電

昭和四年五月十五日第三種郵便物認可
(發)月一同十五五日發行

昭和十四年四月十三日印刷納本
昭和十四年四月十五日發行

定價參拾五錢